スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

黒神王輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

【Ｎコード】
Ｎ７６５５Ｙ

【作者名】
黒神王輝

【あらすじ】
勇者というものを、御存知だろうか。
礼儀正しく、打倒魔王とかそんなものに燃えて、国の奴隷として安っぽい金と装備で街を放り出される可哀想なヤツである。
そんな勇者の称号を嫌々ながらに習得したキルシュは、その王道展開を悉くぶっ潰していくのだった。
変態シモネタ上等！　御都合満載、メタさ満載、イケメン美少女変態満載のくたばれ正統勇者ファンタジー。勿論、シリアスなんてぶっ潰します。

序章　ハーレム&逆ハーレム（前書き）

ライト&メタの新境地を開く為の実験台です。

序章　ハーレム&逆ハーレム

旅立ちには、理由が付き物だ。
本当の理由に、建前で蓋をして、尤もらしい事をでっち上げる。事、勇者に関しては、八方美人的な意識が必要になるという。
世界の平和を守りますー、とか。魔王を退治しに行っちゃうよー、とか。聞けば、大半は魔王に金を貢いで影を潜めてもらっているとか。夢も希望も勇気も無い話だ。けど、現実である。
しかし、残念ながら勇者はなろうと思ってなれるものではなく、血統である事が多い。その所為で、国王や村人達に良い顔をしなければならないと言う強制が目立っているのだ。示しがつかないとか、いいじゃんどうでも。俺の生活を動かす為には、全く関係ないし。
「勇者よ……勇者キルシュよ」
「あー……？」
呼ばれて、適当に返事をしつつ向き直ると、むさっ苦しい髭面が目に映る。
こんな何の変哲も無い、無駄に髭だけが立派なステレオタイプの国王なんて、もう時代遅れだろう。新進気鋭の爽やかな王でも嫌だが……うん、女王様がいいよ。皆大好きだろ？
こっちの態度に咳払いをして、王は無駄に低い声で言葉を発する。普段の間抜けな声音とは、えらい違いだ。
「キルシュ。お主は剣が得意ではなかったな。熱心に我が国――エメラキスカ王国の象徴である風の魔術を学び、そしてどんな人物とも――いや、傭兵と親しくしていたな。そこで、得るものがあっただろう？」
「当然っ！　究極のスカートめくりに挑戦すべく魔術を学び、傭兵からは女の落とし方、ムフフなテクから楽しい楽しい小話にピッキング技術！　軽い身のこなし方も教わったぜ！　後、足音や気配を消す方法とかな！　これで風呂とか覗き放題……悲願成就も近いぜ

っ！」
ガッツポーズをカッコよく決めるこちらを、何故か苦々しい表情で王は眺めていた。
「……勇者というよりも、なんだか盗賊になっとらんか？　それも、かなり雑魚臭がしておりそうな……」
「あ、パラメーター見る？」
「え！？　見れるの！？」
名前：キルシュ
Ｌｖ　：１
職業：勇者（笑）
ステータス
体：１６
力：６
技：１０
速：１０
守：３
魔：１４
運：２５５
特殊技能
スカートめくり二級、魔術・風、魔術・水、魔術・炎、傭兵の心得、盗賊の心得
「どうよ！」
「どうよ……ではないわァ！」
流石に頭にきたらしく、王は顔を真っ赤にして怒鳴りたててくる。
五月蝿い。
「そもそも何故パラメーターが出せる！　そして勇者に（笑）がついておるぞ！　それにスカートめくり二級だけ明らかに浮いておる！　後、運がカンストじゃあああ――――っ！！　もっと別の能力があるじゃろぉおおおお――――っ！！」
「じゃあ、勇者らしいパラメーターって何だよ」

「え……体力が高く、力もあり、守備もある」
「んで、足が臭い。超水虫」
「何故じゃっ！？」
「あーあー、うっせぇうっせぇ。んで、俺に何の用？　アンタ、俺嫌いじゃん。娘とかに近づけさせてくんないし」
「あったりまえじゃ！　スカーレットなら五億万歩譲って紹介してやらん事も無いが、お前は不真面目すぎる！　あやつも大概だったがな！」
　勇者一族に生まれ、その次男として育った自分。
　兄であるスカーレットが勇者の任につくはずだったのだが、勇者として魔物の集落を討伐しに行き、そのまま帰ってこなかった。だから、次男である俺が寄越された始末。
　無論、そんなのはお断りだ。女の子とイチャイチャしてたい俺にとって、勇者の使命なんざ邪魔でしかない。
　夢はでっかく、ハーレム王。あ、俺……今、真理に気付いたかもしれない。
「英雄色を好むって言うだろ？」
「そうじゃな」
「俺、超英雄じゃね！？」
「お主はただの色狂いじゃ……。ウチの使用人達のスカートが、何回スカートめくりの犠牲になったか、考えたくも無い」
「でも、アンタそれ見て鼻血吹いてただろ」
「ば、馬鹿モン！　あれは、どろり濃厚トマトジュースが鼻から逆流しただけで……！」
「いつも王様はトマトを残すんです、ってメイドの一人が微苦笑してたけど？」
「と、ともかくじゃ！」
　仕切りなおすように咳払いし、指を差してくる。
「ちっとは勇者らしい事をしてこい！　頼むから！」
「何でだよ！　俺、別に好きで勇者になったわけじゃないしさぁ～

！」
「勇者の権力使いまくっておるじゃろ、お前！」
「キルシュ、イッテキマース！」
――こんな理由があってもいいじゃない、人間だもの。

「あー、ついてねぇ……。勇者っぽい事って何だよ」
くさくさしつつ街中を歩いていると、良く手を振られる。女性も男性も、構わずだ。
「おう、エロ勇者！　とうとう追い出されたか～？」
「うっせーよ。何か、勇者っぽいことしろってさ」
「ムリじゃない？　それより、これ食べてみてよ！　美味く出来たと思うんだけど～」
「アンタなぁ、彼氏へのお菓子の毒見役を俺にやらすなよ」
「え？　これ、お父さんにだけど……」
「むっちゃええ子やん！　……ん、男が食うには、少し甘みが強ぇんじゃね？」
「ありがと！　参考にしてみる！」
「ゆうしゃさまー！　あそんでよー！」
「おいおい、君みたいな子に手ぇだしたら流石に豚箱行きだしさぁー」
「勇者殿……今日も凄まじい性欲ですな」
「いや、だから手ぇださねえっての！　何を聞いてたんだ！？」
街の住人とは、仲がいい。週に一度の日課の所為で嫌われていると思うのだが、どうなのだろう。
親しくしておきたいのは勇者の名目だけで、本当は……。
なーんて考えても埒が明かないので、適当に歩いていく。
と、空に風船が舞い上がっている。高度はどんどん上昇し、今や天に召されようとしていた。

「ふーせんがぁ……」
「仕方ないでしょ？　手を離すのが悪いんだから……」
「でも……うっ……ううっ……」
「ああもう、泣かないの！」
そんな親子のやり取りを見兼ねて、俺は建物の陰に隠れ、点になりつつある風船へと手をかざした。
空気中の魔素と呼ばれる物質を、自身の精神を触媒に魔力へと変換し、正面に飛ばす。これが、魔術の基礎。
普通は力いっぱいぶつける事しか念頭に無い。魔術は、対魔物や山賊の切り札で、威力が問題でもあるのだ。
しかし、そう言う連中は決まって馬鹿だ。数をこなして強くなろうとしているから。
必要なのは、効率よく魔素を集める集中力と、大量変換に必要な精神力。そして、受け皿となる己の体力だ。無論、俺はこの三つを幼少より鍛えている。
更にコントロールの修練を積めば、スカートめくりは当然、こんな事も出来るようになる。
「紡ぎ、そよげ……」
詠唱は魔素を魔力変換し、展開した魔方陣に飛ばす役目を担う。魔方陣に届きさえすれば、何でもいいのだ。下級なら、言葉数も少なくてすむ。まぁ、魔力によりけりだが。
「手繰り寄せる風の腕（かいな）」
魔術名を叫ぶのは、イメージを固める為に必要な行為。これもまた、発生させた魔方陣に届かせる事で、発動の引き金となる。ちなみに、イメージさえ出来れば、言葉は何でもいい。事実、今のもイメージに合わせて適当に言っただけだ。
言い忘れたが、変換できる属性は本人の素質に由る。俺は風と水、そして炎が使える。
で、俺が思い描いたのは、風の腕。イメージどおりに顕現した風が、遠く離れた風船を優しく抱き寄せ、こちらまで持ってくる。

泣いていた少女の前に風船を持っていってやり、彼女が持ったと同時に魔術を解く。勿論、気付かれないように。
「ママ！　ママ！」
「……えっ！？　それ、どうしたの？」
「風が吹いてね、こっちに来てくれたの！　で、持つまでまっててくれたんだよ！」
「……そう。じゃ、感謝しなきゃね」
「誰に？」
「頭がくすんだピンク色の、お兄ちゃんに。ね？」
そんなやり取りを背に聞きながら、キルシュは歩いていく。
行く場所は、自分の家だ。
裏路地にある酒場。昼間は酒の営業はしていないのだが、軽食や昼食なんかを食べさせてくれる。
スウィングドアを押して入ると、昨日のが残っているのだろう微かな酒臭さと煙草の臭い。それらを埋め尽くすように、料理のよい香りが漂っていた。
店主である男がこちらを見、何かを投げ寄越してくる。油紙に包まれたそれは、暖かいホットドッグだ。
「ちゃんと食えよ？　お前、男のくせして食が細ぇからな」
「サンキュ」
包みを開けつつ、空いていたカウンター席に腰掛ける。
店内は木造で、そこそこ広い。夜は大柄な客や冒険者などで賑わうが、昼は学者やらも軽食を摂りに来ている。そこそこ繁盛してるのだ。
「どうしたよ。いつも日課もその調子じゃ成果なしか？」
「いや、まだやってねぇ」
マスタードたっぷりのそれを齧る。分厚いボイルウィンナーと新鮮な葉野菜の食感が見事で、相変わらずピリリと舌を刺激するマスタードソースが最高だ。ホットドッグは、この店が俺にとっての一番だと思う。

そんなこちらを、昼に星でも見たかのような目で見る店主のワーグナー。
「お前……熱でもあるのか！？　あの『桃色の脳細胞』とか『煩悩の塊』とか言われてたお前が！？」
「……誰が言ってた？　裸に剥いて教会の十字架に一日中逆さにつるして曝してやる！」
「スカートめくりが特技で、一ヶ月の下着の色を統計しているヤツがそんな事いうのか……」
高尚な日課とは、風の魔術でスカートをめくり、瞬時に見定めたパンツの色を統計して、この街の性欲推移を図るものである。
この街は純白が六十とかなり素晴らしい結果を残している。個人的には黒もありだが、たまに見かける紅いのはどうかと思う。まぁ、好き好きだとは思うが。
「それよりも聞いたか？　お前みたいなヤツが居るんだと、しかも悪質な」
「あぁン？　聞き捨てならねぇなそりゃ！　この街の女性を傷つけるヤツァ、この俺が――」
「同じ事を言わせる気か、アホ。……女性だよ。その犯人。ターゲットは、若い男だ」
「はぁ……？」
――何が楽しいんだよ、それ。
と、カウンターで食事をしていた青年が、ものすごい形相でその話題に食いついてくる。て言うか、それ餡子入りパスタライスじゃん、ゲテモノメニューの。舌大丈夫か？
「オレが……オレが被害にあったんだ！　初めて出来た彼女とデートしてる時にさ、その女が通り過ぎて、下半身が一瞬で露出しちまったんだ！」
――誰が得するんだ、そんなの。
良く見れば、顔立ちの整った青年だ。パッと見、神経質そうで、故にモテなかったのだろう。不憫な話だ。まぁ、とりあえず口の周

りの餡子拭けよ。
「彼女からは『……ちっさ』って言われて、その通り過ぎてった女の子は『残念、好きじゃないですねぇ』って言われて……。で、彼女に……フラれたんだ……」
「「う、うわぁ……」」
ワーグナーと二人で、顔を引き攣らせる。そんな、えげつない。男の自信を根こそぎ奪う鎌のような言葉を吐く女……なんて恐ろしい。そして餡子を拭け。
「オレが多額の金を払って情報屋に問い合わせてみても正体不明。ただ、異国の剣やら色んな武器を扱うそうだ」
そう言い終えると、男は袋をカウンターに叩きつけるように置く。中で弾けた音からして、金貨だ。それも、相当枚数の。いやだから拭けよ、餡子。
「頼む、勇者！　ヤツを……ヤツを殺してくれ！」
「ヤダね」
鼻で一蹴し、餡子に塗れて情けない男の面を笑ってみせる。
「殺してなんになる？　お前はその女に見下されたまま、生活しなきゃなんねぇ。何故、そんなことが出来るんだ？　そんなの俺はごめんだね。根性無しの尻拭いもな」
「あ……」
悔しそうに歯噛みする青年から顔を逸らしつつ、視線だけ向けて、神妙に聞いた。大切な事だ。
「そいつ、可愛いか？」
「あ、え……？　えっと、幼さが残るセクシー系って言ってた様な……」
「じゃあ俺の女にする！　決まりだ、ハーレム計画の一端を担う存在になってもらわにゃな！
「な、なら……これを軍資金に――」
男が次に紡ごうとした言葉を、食べかけのホットドッグを口に捻じ込んで黙らせる。餡子と最悪なハーモニーを奏でること、請け合

いだ。
「――その金で次に出来る彼女にプレゼントでも買ってやれ。俺が女口説きに行くのに、何で金が要るんだよ」
席を立ち、店の奥にある私室に入る。
木造の小さな部屋だ。ベッドと机があり、替えの服がたたんで数セット置いてあるだけの、簡素な部屋。
白い気品のあるズボンと、黒い襟付きのシャツはそのまま。若草色のローブに、激しい動きにも耐え得る革のブーツに履き替える。短刀や小道具を収納したポーチをベルトに括りつけ、準備は万端。
店内に戻ると、青年と同じくらいの年齢の男達が、こちらを見ていた。
「お願いします！」
「だーかーらー、俺は女口説きに行くだけだっての！　ほら、散れ散れ！」
手をパタパタさせて男達を解散させつつ、俺は駆け出し、
「紡ぎ、纏え……誘い吹く風の跳ね靴」
魔術を発動させて、文字通り跳んだ。すると、風が身を運んでいく。高い建物へと、誘われるように。

上から見下ろす街並みは、とても綺麗だと思う。
ちゃんと整理されて作ってある石畳の通路に木造や古い石垣で出来た建物。同じく、整理して張り巡らされている用水路。
行きかう人々にはほとんど貧富の差はなく、スラムもない。賑々しい市場を筆頭に、カッコいい、可愛い、逞しい、知的な少年青年が盛りだくさん。
「……いいなぁ」
――涎が出そう。
「おっと。いけないいけない。この街ではあんまり騒ぎにならない

ようにしないと……」
　前の街みたいに、不細工でむさい男の人たちから追い回されるのは勘弁だ。
「――でも、もう騒ぎになってんぜ？　若い男の下半身を通りすがりに露出させる最悪な女の噂」
　背後から届く、青年の声。いい声だと思う。軽い感じがしているが、それとは裏腹に怜悧さも幾分かある。こちらの対応を決めかね、そしてどういった風にでも対処できると言った自信と警戒の現われでもあるのだろう。
　とりあえず出方を伺うべく、会話を続けてみる。
「そう？　でも、この街にはスカートめくりを生きがいとしている人もいるみたいだし……」
「ありゃ趣味だっつの。下着の色の統計をつけるのが、習慣なだけだ。習慣をどうこうと口出しされる謂れはないね」
「凄い理屈」
　言いつつ、振り返ってみた。相手の顔を見ないことには、始まらない。
「え！？」
「おっ！？」
　好みをストレートで打ち抜いた男性が、そこにいた。
　紫だかピンクだか分からない、中途半端な色の髪を長くし、不思議な模様をした黒のバンダナで適当に髪を止めている。
　瞳も同じような色をしていて、黙っていればクールな二枚目という顔立ち。バランスの取れたスタイルも、足の長さも、纏っている服の質も、嫌味にならない程度に上等で、男女共に好かれそうだ。
　そんな彼は、こちらを見て驚いたような顔をしている。何なのだろうか。
――正直に言うと、メッチャ好みだった。

色素の薄い、金とライトブラウンの中間をいく癖のある髪を長くなびかせ、あどけなさを残す可愛らしいが美しい顔をこちらに向ける。
少しだけだが見開いている瞳の色は、蒼。物に動じないのか、知っていたのか、背後から話しかけたのに会話を交わせる余裕もある。性格も、そんなにキツそうではないか。どちらかと言うと、天然系に見える。
が、あまり表情には出ないようだ。苦労をしたか、人を多く殺してきたか、精神に障害があるのか。感情が表に出ない人物は、大抵そんなものだ。
ともあれ、自分より頭一つ低いくらいの身長も、バランスの良いプロポーションも、小洒落た青いドレスも素晴らしい。特にドレスは肩紐が細く、体のラインが強調される上にスリットまで入った大人のイメージで、どこかあどけない彼女と背反しているようで、そこが実にツボである。
「あの、ちょっとズボンを下ろしてくれない？」
「いきなりアグレッシヴな発言頂きましたー！　て言うか、それがおかしいだろ！　何でだよ！」
「え……私のショーツも見せなきゃダメ？」
「ケッ、自発的に見せられても意味ねぇよ」
「え？　あなた、スカートめくりの人でしょ？　パンツが見たいんじゃないの？」
「馬ッ鹿野郎！　全然違ぇよ！」
そう言う事ではないのだ。同好かと思ったら、ロマンを全然分かっていないらしい。
拳を握り締め、瞳に炎を宿しつつ、力説する。
「恥ずかしながらもじっくりとたくし上げられるのがいいんだ！
それか、自分でスカートをめくるとかな！　恥ずかしがるってのが大事なんだよ！　それに、俺自身が見ること見せることに関わっていないパンツに興味ねぇ！　それに、パンモロよりパンチラの方が

何かエロいし！！」
有能である諸君らは、勿論賛同してくれるよな！　例え理解されなくても、この胸にくすぶっている何かが反応しているはずだ！
「……ヘンなの」
首を傾げる少女に向けて、今度はこちらから質問せねばなるまい。
「んで、何でお前は男の尊厳をズタズタに引き裂くような真似をしてるんだ？」
「……えっとね。右の太ももに、大きなほくろのある男の人を探してる」
「何で？」
「……仇だから」
彼女の表情は変わらないが、雰囲気が違う。穏やかな普段のものから、波紋も何もない水面のように静かなものへとシフトしている。静かなる殺意だろう。
「……父親の仇か？」
「ううん」
「んじゃ、母親？」
「違うよ」
「……恋人？」
「正確には、片思いだった。私の、ね」
――恋人を、取られたのか。
「その人、幸せにするって言ってたのに……死んじゃった。片思いの人、自殺しちゃったの。だから、私はあの男を見つけ出して、ぶん殴る」
「だからって、ズボンを切る事は……」
「顔も覚えてないし。覚えてるのは、彼との一夜を偶然見た時に目に付いた、その特徴だけ。いきなりズボンを脱いで、だなんて、聞いてくれるはずないしね」
――だからって、切る事ぁないだろうに。
と、彼女が浮かべた微笑は、幼い顔立ちにあまりにも不釣合いで。

大人のような反面、子ども染みた純粋さを覗える。こんな子が暴れたら、相当拙い。
いや、それ以前に！　今冷静になって考えてみたが、それちょっとおかしくね？
「……あの男？　好きだった人は、男なんだろ？」
「うん」
「お前が追ってるのも、男？」
「そうね」
「え、ちょ……って事は、オトコドウシデスカ……？」
「そうよ」
臆面もなく表情も変える事も無く端的に言ってくれました本当にありがとう御座まアッーす！
「う、うわぁ……。そりゃ、八つ当たりすんのも当然だわな」
「え？」
「ん？　いや、そうだろ？　男にとられたから、その美少年に八つ当たりを……」
「ううん。最初はそのつもりで、探すのもかねてたんだけど……段々、美少年が好きになって。逆ハーレム計画でも作ろうかなって。今は、それぞれのナニに感想を言うのが趣味なの」
「発想が凄い方向に飛んでってるなぁオイ！　……ん？」
逆ハーレム創造を目指している？
ならば、これは……同じ趣向じゃないか！　実に素晴らしい！
「なぁ、俺はハーレムを目指してるんだ。美少年はお前に、美少女は俺に。二人で一緒に、目指さないか？　ハーレム計画！」
と、こちらをポカンと口を開けて見てくる女の子。いや、そりゃ確かにヘンな事を言っている自覚はあるが、効率がいい。何より、美少年に相手を取られなくてすむ！　これ、重要。
しばらく考えた後、彼女は柔らかく微笑んで、頷いてくれた。
「……うん、いいよ。じゃ、私からも一つ。無条件で協力する代わりに、ね」

「おう！　俺は勇者だからな！」
「どこかで右の太ももにほくろのある人に出会ったら、殺すか、私に連れてくるかの二つ。いい？」
「おう！　協定成立だな。俺はキルシュ。十九歳」
「私はエトワール。十七歳」
「ってなワケで、ちょいとステータスを拝見しまーす！」
「え？」
名前：エトワール
Ｌｖ　：６
職業：ウェポンマスター
ステータス
体：２７
力：１６
技：２１
速：２３
守：０
魔：０
運：５１
特殊技能
剣士の心得、樵の心得、射手の心得、多数戦の心得
「……凄い特技。初めて見た」
空中に浮かんだ文字と数字を見て、彼女――エトワールはかなり驚いているようだ。てか、強いなアンタ。戦わなくてよかったー。
「じゃあ、キルシュのパラメーターも見せて？」
何だか、かなり見劣りしてしまうが……まぁ、いいか。
「あらよっと！」
名前：キルシュ
Ｌｖ　：１
職業：勇者（笑）
ステータス

体：１６
力：６
技：１０
速：１０
守：３
魔：１４
運：２５５
特殊技能
スカートめくり二級、魔術・風、魔術・水、魔術・炎、傭兵の心得、盗賊の心得
「ぷっ……なんで、勇者に（笑）がついてるの？」
「うっせ！　こっちみんな！」
「それにパラメーターが盗賊寄りだよ？」
「ゆ、勇者がみんなマッチョメンだったら怖ぇだろ！　俺はイケメン担当！　文句ないだろ！」
「うん、黙ってたらカッコいい。残念なイケメンかな」
「おおーい！　残念とか言うなよ！　俺のシルクのハートがクラッシュしちまうよ！」
「それに、勇者の癖に面白おかしいくてスケベだし。普通、真面目でしょ？」
「面白おかしくてスケベな勇者でもいいじゃん！　それに決めるときは、びしっと決めるぜ！」
カッコいいポーズを取るも、彼女はどこ吹く風を眺めている。いや、こっち見ろよ。
溜息を吐きつつ、真っ直ぐにエトワールを見つめる。
視線に気付いてか、彼女も振り返って、俺の目をじっと見つめてきた。
「ま、何にせよ……」
「うん……」
どちらからともなく、拳を突き出し、

「一蓮托生ってな」
今、この空に近いこの場所で、
「うん。よろしく、キルシュ」
ハーレム建設の夢への協力を、ここに誓ったのだった。

序章　ハーレム&逆ハーレム（後書き）

……うん、完全に勢いですね。他のもかけよと思いますが、筆が進まないのでこちらを乗せて見ました。

一章　魔の森のロリババァ　前編

ハーレム同盟結託、その次の日。
王の召集を受けた俺は、その場所に来ていた。相変わらず、馬鹿みたいに高そうなカーペットだ。醤油でも垂らしてやろうか。
「……んで、何か用？」
隣にはエトワール。二人で城に行き、王と向かい合っているのだ。
王はこちらを見、こめかみを押さえた後、静かに尋ねてきた。
「その方は誰じゃ？」
「逆ハーレム目指すって言うから、俺と手を組んでもらったヤツ。あ、街で噂の若い男をひん剥いてるヤツな」
「お前のパーティーは何かがおかしいぞ！　何でよりによってそんなヤツを仲間にしとるんだ！」
「それは……」
「私達が……」
「「熱い志で一蓮托生を結んだから！」」
「何じゃその無駄なコンビネーション！　息合い過ぎじゃろうに！」
キメポーズまでクロスするようにピッタリだったのは予想外だ。意外と、波長が合うのかもしれない。
豪奢な玉座に座りなおしつつ、王は指を鳴らした。いや、鳴らそうとしてかすれた音しか出なかった。
「クスクス……」「クスクス……」
「や、やかましい！　こそこそと笑うでないわぁ！　……おーい、誰か！　例のものを！」
と、数人のメイドが何かを持ってくる。
一つは小袋。一つは剣。一つは紋章だ。
小袋の中には金貨が十数枚に銀貨がそこそこ。剣は見たところ実用と装飾の狭間をいく美しい代物。そして紋章は、見覚えのある紫水晶の首飾り。

「おい、これって……『マジックシェイプ』か？」
「うむ」
変換した魔力を魔方陣に通す必要もなく、思い描いた形に固める事が出来る。魔力の剣とか、そう言う芸当が可能だ。
要するに、魔力はあるが魔術が扱えない連中が使いたがる物。本職の魔術師には、どう足掻いたって敵わないだろうに。
「俺には必要ないぜ？」
「持って行け。お前さんの潜在属性外も使用できる。金属系と雷系が使えるぞ？」
「……これから頼む仕事に、必要になるかもしれないってか」
「どうせ何も考えとらんじゃろうからな、しばらくはワシが仕事を世話してやる」
「はぁ？　そんなのごめんだね。俺は偉大にして崇高なるハーレム計画の第一歩を軽やかに踏み出したところなんだ。仕事なんて絶対に――」
「……森の奥に、魔女がいるのを知っておるか？」
「その話、詳しくお願いしまーす！」
くすっ、と笑いを零すエトワール。ああもう、一々可愛いなアンタ。可愛いは正義、これがオッサンだったらキレてたと思う。
仕方なさそうに溜息を吐いて、王はゆっくりと話し出した。
「……この街の外れに、森があるのを知っておるか？」
「おう。たまに森の泉に水浴びしにいく若い女の子達が――」
「お前はそっち方面から切り離して物事をおぼえて見せんか。……その森の奥に、魔女が住んでいる。彼女の魔力を我が国に有益な方向に活用させると誓わせるか、魔力を奪うかしてほしい」
「魔力を奪う？　それって……」
魔術師の魔力は、肉体がある限り際限なく沸き続けるものだ。限界まで使用したとしても、一度寝れば大半は回復する。
要は、奪っても奪っても出てくると言う事。それを枯渇させるには、根本から絶つしかないわけで。

「手っ取り早い話、従わなければ首を刎ねて来い。生け捕りにしても構わんぞ？」
至極簡単に言ってくれるが、相手の規模がまだ分からないので、動きようもない。
まずは外見だ。そうじゃなければ、そこら辺にいた女性全員を捕らえるか殺すかしなくてはならなくなる。
手始めに、俺は質問を投げてみた。
「そいつ、いくつだよ」
「二百と少しじゃと聞いておる」
――ＢＢＡじゃねぇか！
「はっ、馬鹿馬鹿しい！　俺は老人介護の博愛精神なんざにみち溢れてねぇんだよ！　他のヤツがやれってんだ」
「それは残念じゃな。その魔力で成長と寿命を止め、童女の外見にとどめておるそうじゃが……しかも処女」
「誰もやらなきゃ、俺がやる！　そう、勇者は期待に応えますとも！　フゥーハハハハハハハハ――――ッ！」
勇者らしくない高笑いは、城内に響き渡っていたという。

堅苦しい雰囲気は皆無だったのだが、ああいった畏まった場所が苦手なのだろう。城の外まで出ると、エトワールは気持ち良さそうに背筋を伸ばしつつ、横目でこちらを見て話しかけてきた。
「……で、どうするの？」
「フッフッフ……。ロリババァと言う稀有な属性から手篭めにする機会がこようとは……！」
ロリババァの定義に関しては、個人的に二つ定めている。
一つは、童女の身体にあった年齢で、言葉遣いやら好みが婆臭い人物。
もう一つは、ロリな外見ながら、かなりの高齢をいく人物だ。個人的に、こっちの方が好みではある。だって合法ロリなんだもん！

浮き足立つ俺とは裏腹に、エトワールは冷静な見解を見せてくれる。
「でも、やめた方がいいと思うわ。魔力で身体を若く出来るんなら、相当強い魔力を持ってるはずだし」
「まぁ安心しとけよ。俺、対魔術戦じゃ無敗だしな」
「何で？」
秘策があるのは、まだ黙っておいた方がいい。魔素や空気のうねりで精神を読めるレベルの魔術師なら、ばれる可能性が飛躍的に上がってしまうからだ。まぁ、そんなレベルなら世界をとっくに滅ぼしているだろうが。
とりあえず歯を見せながら笑う。驚きの、白さ！　柔らかくはないが。
「期待してな。んで、貰った剣はどうだ？」
王から貰った剣は、エトワールに渡した。あのパラメーター的にあっているだろう。剣士の心得もあったし。
が、当の本人は不満そうだ。その場で半分だけ抜いて見せてくれる。
「鏡みたいね、この刀身。斬れるのかな、これで」
ミラーフラッシュと呼ばれる鏡のような刀身になる仕上がりで、傷一つないブロードソードの腹には、イマイチと言いたげなエトワールの顔が映っていた。
「王の私物なんだから、何かしら効力があるんだろうけどな」
「知らないの？」
「見覚えがないんだよ。書庫なら片っ端から読み潰したけど、そんなもんはなかったかな」
「本が好きなの？」
「いんや？　知ってれば、傭兵のお姉さんと意気投合して話できるかなーって思って、武器辞典五十冊丸暗記しただけだ」
「そのエロに関する力の源が知りたいわね」
「そりゃあ当然、俺の息子からさ」

「え、息子がいるの？」
「ああ、股間の方に一人な」
「それは素敵ね。是非、ここで見せて欲しいわ」
「フッ……脱いでいいのは、脱がされる覚悟のあるヤツだけだ」
先を歩いていたエトワールが立ち止まり、俺も足を止める。
伝わるのは張り詰めた空気。互いの意見が対立し、互いがどうしてもその意見を通したい時――
「じゃ、脱がしちゃおうか」
「その前にパンツを奪われないよう気を付けるほうが先だぜ？」
「あ、私今日は履いてない」
「えっ！？　マジでっ！？」
――そう、人間は武力解決を念頭に置く。
目にも留まらぬ速さで踏み込んできたエトワール。先程の剣を抜き放ち、軽々と一閃を放つ。
城から外れて、人一人いない街道に出ている。周りの建物の為か、窮屈な動きだ。それなら、こちらに歩があるかもしれない。絶対にあのスカートを持ち上げてやる！
バックステップで避け、高さを意識して跳んだ。
「紡ぎ、駆けろ……天駆ける羽馬の靴！」
ショートブーツに風の魔力である緑色の輝きが纏わり付き、俺を宙にとどめてくれる。更に高い場所へと走る為、空気の波に乗ったり滑空したり出来る靴を魔術で作ったのだ。
が、
「嘘ぉっ！？」
「あら、ホントよ？」
遥か十メートルは飛んでいるのだが、跳躍でエトワールは追いついてきたのだ。絶対、こいつ人間じゃねぇ！
「こなくそ……っ！」
呪文を言っている余裕はない。ただ、もう適当にぶちまけとけ！
「おりゃあああああああああああああああああああっ！

！」
広さを意識して、今度は水の魔術を放つ。
叫びにありったけの魔力を掻き集めて、展開したのだ。元々、イメージなんて幾千もの魔術を放てば思い浮かんでくるもの。詠唱は必要ない。とは言え、最近はそれを知らず、詠唱をしている馬鹿な輩もいるようだが。
魔方陣から流れ出たのは、威力はない水のヴェール。が、重さはかなりのもの。
「くっ……！」
空中にいたエトワールを水は叩き落し、そして……
「おっほぉ！　これは……！」
水に濡れ、よりピッタリとしたドレスが、エトワールの殺人的なボディーラインを強調させていた。やはり胸元はかなりふくよかでいて、なのに腰は細く、全体的にすらっとしたシルエットが堪りません！　いやー、ご馳走様です！
が、刹那にその姿は消え、気付けば眼前に穏やかな微笑をたたえた彼女の姿が。
「そこっ……！」
俺の股間へ伸ばされる彼女のしなやかな手。思わず、悲鳴を上げてしまう。
「いやんっ馬鹿！　どこ触ってんのよエッチ！　だ、誰にも見せた事ないんだからね！　勘違いしないでよ！」
と、触る直前で、どちらも動きがピタリと止まる。
微妙な空気の中……恐る恐る、エトワールが尋ねてきた。
「……え？　今の、素なの？」
「や、ち、違う！　さっきのは俺の中の女性がちょっち目覚めただけで……！」
俺の素晴らしい理由（いいわけ）を聞かず、エトワールは生暖かい微笑を浮かべて、こちらの肩をぽんぽんと叩いてくる。
「今度、スカート貸してあげるね」

「ちゃうねん……！　ホンマ、今の無しや！　そんな認識されてもうたら、もうお婿に行かれへんがな……」
「うんうん、大丈夫。大丈夫だよ？」
「やめてー！　その生暖かい目をヤメテぇええええっ！！」
実に間抜けな叫びが、悲しく街道に木霊した。

「何じゃ……。また、人が来るのか」
そう呟いて、安楽椅子に腰掛ける。
もう誰にも会いたくない。誰にも、関わりたくない。
だから……そっとしておいて。
「……消してやる」
白く細い手がゆがみ、青白い閃光を生んだ。
一瞬照らされたその顔は、白く……悲壮な顔をしていた。

「と言うわけで、やってまいりました。ここが現場の泉です」
小声でリポートしつつ、木陰に隠れて泉ではしゃぎあう女子グループと少年のグループを、それぞれ俺とエトワールは眺めていた。
「どうよ。この位置は見つからない上に、良く見えるんだぜ？」
「もうここに家を建てたいわ。はい、これお礼のパンツ」
ありがたく、妙に暖かいそれを受け取り、ポケットの中にしまっておく。え、さりげなく何やってんだって？　へへーん、羨ましいだろ。シルクの白だぜ？
しかし、やはりエメラキスカは女性の平均水準が高い。勿論、美人さだ。
エトワールみたいに抜群の美少女とまでいかずとも、結構可愛い子や綺麗な人は多い。水を掛け合い、甲高い声ではしゃいでいる娘も、そこそこのレベルだ。

少年達の方は、やんちゃ盛りらしい。流石にショタコンではないらしく、エトワールはいつもの穏やかな笑みを浮かべて、鼻血を滝のように流していた。……ごめん、ストライクゾーンみたいだったよ。

「なぜかしら、この胸の高鳴り……」

「やめとけ、犯罪だから」

「でも、青い果実から美味しく育てるのは憧れじゃない？」

「……お前、天才だな！」

これからはそんなことも考えて視野を広げようと決めた――刹那だ。

突如、雷雲が群れてくる。キャッキャウフフ（？）とはしゃいでいる、一般人の下へ――

魔力の気配を感じ取った俺は、エトワールが気付くよりも先に精神を集中させた。

「キルシュ！」

「おう！　流れ、弾け。展開するは壮麗たる蒼……清き天空の雨傘！」

雲の範囲に合わせる事で、中級規模の魔術を使わざるを得なかった。詠唱が長いのも、中級であるが故。

そこそこしんどいが、ここで女性達を餌食にしてしまう方がよっぽど辛い！

電気は水を通すと言われているので、一見ミステイクに見える。が、それは水の中にある物質に電撃が走るだけ。水の純度を高め――俗に清水と呼ばれるレベルにすると、雷を弾けるのだ。それも含め、中級でなくてはならなかった。

そして、展開したのは水の膜。ドーム状に広がって、それが泉全体を覆いつくした刹那、巨大な雷光が頂点へと落ちていく。

その衝撃はかなりのもので、展開していた水を集めても、あの雷には及ばないだろう。根本的に、注いだ魔力の絶対量が違う。

「くそっ……！　こうなりゃ……！」

古代の文献で見つけて、思わず燃やしてしまった最悪な魔術。アレを放つしかないか。
「紡ぎ、化せ。展開するは堂々たる緑。あらゆるものを風化させ、侵食せよ！」
風化の呪文。これは、鉄や生命でさえも奪いつくす、黒い風。
「――悪魔が払う漆黒の破風！」
豪っ！　と黒い風が生じ、雷撃とぶつかる。
雷は粒子の集まりらしい。魔術では、それを魔素で作れるらしいのだが、雷は才能がなかったので『マジックシェイプ』無しでの生成は不可能である。
ともあれ、俺が放った最悪の古代魔術は粒子をも風化させ、雷を奪いつくして霧散した。
「……凄いわね。って、大丈夫？」
「ああ、心配すんな……」
呼吸が荒くなり、頭痛が酷くなる。古代魔術のような強力なものを速攻で編み上げるのは至難の業だ。出来たとしても、精神力は愚か、体力まで持っていかれる。
特に、水の純度を高めるとか、炎の温度を変えるとか、オプションをつけると余計にしんどい。
はぁはぁ、とこちらの息を見て、エトワールは神妙に頷いた。
「発情、してるんだよね？」
「俺は病気か何かか！？　年がら年中発情して……るかもしれんが、魔術を使った後、性的興奮なんかするか！　それなら俺の股間は、毎時エレクトオブザフィーバーだっつーの！」
「でも、魔術師の次は賢者でしょ？」
「その賢者じゃねぇよ！　……ああ、ったく！　それよりも、彼女等を避難させてくれ。ちょいと俺を休憩させてくれよ……」
「うん、行ってくる」
「四十秒で支度しな」
その背に声を掛けつつ、木陰に寄りかかる。やはり、無茶が過ぎ

たようだ。これからは、もう少しゆっくり詠唱しよう。
と、腹の虫が鳴る。そういえば、彼女と別れてその翌日まで、何も食べていない。
「……習慣、か」
思い出すのは、魔術の修練。
空腹でイメージが出来ないケースが絶対にないように、修行の際は常に空腹で行うのがキルシュの修行法だった。おかげで、今も昔も食が細い。
だから、空腹でも戦える。ただ……エネルギーが切れると同時に、倒れてしまうが。
「……よし」
呼吸が整い、頭痛も治まった。
エトワールがいないうちに、キルシュは魔力の発生源を辿る。
先程の雷雲は、魔力の糸を介して魔方陣に魔力を伝達していた。確かに出来るが……現実的ではない。超常的な魔術の更に上を行く、神技とも呼べそうなものだろう。
使えるような人間は、人間の含有できる魔力を超えている。魔族のハーフやら、高位な魔族――例えば、ヴァンパイアロードでも、それは不可能。魔力が足らなさ過ぎる。ドラゴンが人化すれば可能かもしれないが、それでもレッド、ブラック、ホワイトと言った上種族でないと出来ないだろう。
『マジックシェイプ』――それを介せば可能だが、糸状に変化するものなんて、使えない。見慣れているし、糸に勢いを持たせるのは難しい。
可能性として考えられるのは二つ。
一つは、もう凄まじい魔力を持っている事。俗に言う、力技である。魔力に物を言わせて、魔方陣を遠くに展開し、糸ではなく魔素の本流として細い道を作り、魔方陣と繋げる。こうすれば、音声で魔力を届けるまでもなく、発動可能だ。ただ、眩暈がするほどの魔力が要る。

もう一つは、『マジックシェイプ』に似た道具で、魔術に指向性を持たせる『魔術指揮棒（マジックタクト）』――要は杖だ。
魔術師が使う杖は、魔力を伝達しやすい白金などで出来た物で、物によっては魔力を秘めた宝石――魔石を先端に頂くものがある。
杖の先から放射するイメージなら、ブレもなく、また無駄な魔力も必要なく、そして魔石の補助により、容易になるのだ。まぁ、こちらも正規に購入するとなると、国の許可証やら貴族の屋敷が三つ買えるような金額やら……違う意味で眩暈のしそうな条件が山積み。
そんなヤツが相手なら、エトワールは向かない。
魔力を所有していない人物に対して、魔力はダイレクトに影響を及ぼす。
十の魔力で、例えば俺が魔術を受けたとする。俺の持っている十四の魔力には敵わず、結果、ダメージなし。
だが、魔力ゼロの彼女が当たれば――十のダメージがそのまま通る。危険なのだ。
特に雷を使うなら、かすっただけでも致命傷だ。反対に、魔力を持つ相手にはそうそう効くようなものではない。魔素の粒子による攻撃だからだ。
光、雷、炎、風、水、土、金属、闇の順番に、魔力を持たないものに有効である。魔素を固め、変換するのに時間が掛かる土や金属、闇は、他の才能がない限りはあまり使用されない。
なーんて語っては見たが、結局は力技で何とかなる。雷の魔術だろうが、圧倒する魔力さえあれば、どんな相手も潰せるのだから。
「……それに、秘策もあるしな」
笑みを浮かべつつ、目的の場所まで歩くキルシュ。
その後を追う、騎士達の影に気付く事無く。

一章　魔の森のロリババァ　前編（後書き）

御感想、ありがとう御座います。
突っ込みどころも満載な勇者ですが、優しいこの男をどうか見守ってやってください。

一章　魔の森のロリババァ　後編（前書き）

注意。本小説で行われている行為は、絶対に真似しないで下さい。犯罪です。

一章　魔の森のロリババァ　後編

誰にも踏み込んで欲しくない領域を、誰もが持っている。
それは物理的な空間だったり、心理的な場所だったり。個人個人において違うだろう。
人は無意識のうちに、そこから人を遠ざける。よほど親しい人物でないと、踏み込んでもどうにもならず、気まずくなるのだし。
私はそれが人一倍に広くなったと思う。だから、誰にも……もう居場所を奪わないで欲しい。
が、そんな願いは知らんとばかりに――
「おっじゃまっしまーす！」
――何故か窓から侵入してきた優男は、今までの概念や私の気持ちを、スタイリッシュに粉砕していった。

窓破壊まで、五十秒前の話。
俺は眼前のドアを見つめ、顎を撫でた。
（う～ん、着替えを覗くべきだろうか。いや、相手は遠隔で魔術を放てる相手だ。気配を消しているとは言え、何となく気付いているだろうな）
そんな事を考えつつ、他に出入りできる場所を遠目で探していく。
正面に入り口一つ。後は、窓が四つと、なんとシンプルな建物だろう。驚きである。
（堂々と正面から突入するのは、馬鹿のやることだな。友好的に、且つ俺が馬鹿だとカテゴライズされないようにするには……！）
大きめの窓を見て、俺は助走をつけつつ、音もなく跳んだ。
「スタイリッシュ☆　おっじゃまっしまーす！」
言いつつ、窓から進入する。え、その結論はおかしい？　うるせぇ！　ロリババァを前にして俺の興奮は最高潮なんだよ！　少しく

らい適☆当でもいいじゃん！
窓を粉砕し、木の床に降り立つことに成功。流石は俺だ。
「な、何じゃお前……！」
深みのある高い声が、戸惑いを隠しきれずに揺れている。
彼女の方へと振り返りつつ、東洋のカブキ……だったか？　そんなポーズを真似つつ、見得を切ってみた。
「俺様、スタイリッシュに参上！」
「こら、動くでない！　破片が散らばるだろう！」
「あ、サーセン……」
頭を下げて、丁寧にガラスを片付けていく童女を見――目を見張った。
魔術師限定だが、髪の色で大体才能は判別がつく。
俺は炎の才能が強いから紅系。それに水の青と、風の緑が混じって、くすんだピンクのような色合いになっている。
彼女は、薄緑掛かった白髪だった。光と雷を有しているらしいが、いやそんなことよりも……！
「綺麗だな、その髪！　ちょっと、もふらせてください！」
「な、なんじゃ！？　お、お前、ちょ、や、やめんか！　くすぐった……！？」
癖のあるふわふわした髪を手繰ってもふもふしてみる。ううーん、気持ちがいい。この艶と弾力、それに加えていい匂いがする！　最高です！
しばらく堪能していたかったが、それは無茶らしい。
「この……っ！　近付くなぁあああ――――――ッ！」
「あばばばばばばばばばばばばばばばっ！？」
突如、叫びで発動させた電流に身を拘束される。
憤然と無い胸をそらして、少女はこちらを憮然と青い瞳で睥睨する。可愛い。
「フン。このまま焼かれるがよい。この電流、よもや耐え切れまい？」

「ぎ……」
「ぎ？　なんじゃ？　辞世の句でもできたなら、聞いてやらんでも――」
「ぎ……ぎ――――ギィンモチいいいいいいいいいいいいいいいいっ！！」
「な、ちょ……えええええええっ！？」
そう、秘策とは。
相手が女性――美女、美少女であるならば、妄想によって痛みを快楽に変換できる。セルフ・M・スイッチである。
「はぁっ、はぁっ……！　ロリ美少女に電流なんて、はぁっ、はぁっ……！　いい……っ！　すんごくいいっ！！」
「ちょ、よ、寄るでない！　気色悪いぞ、お前ぇ！」
電流がつよくなるけど、これはツンデレで言うツンなんだよね！？　ビリデレとかわけわからんジャンルに萌えるお前らも、共感してくれるよな！
「フヒヒ……！　何で逃げるんだい？　分かってるよ、これは君の愛なんだろ？」
「何故そうなる！？　全力全開で拒否しておるのが分からんのか！」
「その後、全力全開で愛してくれるんですね！　分かります！」
「どういった脳構造をしとるのだお前はっ！」
「お前……！？　やだ、そういえばいきなりシ・ン・ミ・ツ♪」
「ど……どっかへ行けぇえええええええ――――っ！！」
高速の魔弾。多分、光の弾だろう。一瞬で、しかも動揺した状態から放たれたのにも拘らず、必殺の威力を誇っていると見た。
「流れ、軋め！　流るる水の嫉妬心！」
彼女が叫ぶのとほぼ同時に完成した魔術を放つ。
水を通った光は屈折し、俺から僅かに外れ、奥の窓を吹っ飛ばして消えた。危ない危ない。
が、彼女は本気の殺意を以って、こちらを睨みつけてくる。まるで、拗ねた幼子のように。

「先程の魔術を防いだのは、お前か」
「凄いっしょ！？　これが俺の勇者たる由縁だぜ！」
「……警告する。どこかへ行って、もう関わらないでくれ」
　無視かい。泣いちゃうぞ、寂しいし。
「何でそんな事言うんだ？　つれないぜ。こーんな暗い森にいるから、考え捻じ曲がっちまうんだよ」
「そうか。なら、そんな女と関わるな。頼むから……一人にしてくれ」
　重い、雰囲気だ。
　何が彼女をそうさせているのかは分からないが、何か根深いものを感じる。人生経験で言えば、トラウマに近い部類の拒絶に似ていた。
「私は……五百歳になる」
「え？　見えねぇよ」
「当然だ。……私の中の魔力が強すぎて制御できず、成長が止まっているのだからな」
　自嘲的な笑みを浮かべ、彼女はゆっくりと椅子に腰掛けた。
「私は貧しい家庭に生まれて、ぬくぬくと育った。この年齢まで、魔術の才がなかったただの少女だった。ある日の事だったよ。突然村を襲った凄まじい闇の魔力にあてられ、私の中に眠っていた魔力が起きてしまったんだ」
　――魔力を持つものは、先天的か後天的かに分かれる。
　魔術師の家に生まれれば大抵は魔力を持ち、極まれに一般家庭からも誕生する事がある。
　が、後天的は、魔力の才を持ち、何らかの形で魔力が呼び覚まされたりする突発型だ。専門知識も何も持たない状態で放り出され、暴走した例も少なくない。
　ましてや、闇の魔力だ。何らかの影響を、人体に与えたに違いない。
「……私はな、人の身であると同時に、その闇の魔力に中てられ、

化け物の姿として認識される事になったのだよ」
「俺には普通に見えるけど？」
「そうだな。魔力を持っているからだろう。……それ以外は、思わず石から剣、大砲まで持ち出されるほどの、醜悪な化け物に見えるんだそうだ。呪い、だろうな」
やはり表情を変えず、淡々と彼女は言葉を紡いでいく。
「最初の村は追い出され、気持ち悪がられて誰にも近付いてもらえず、だったら破壊しようとした結果、生き残った魔術師の間で魔女と呼ばれるようになった。……それだけだ。一般人には風に音声を乗せて警告をしているが、入ってくるとなれば迎え撃たねば大きな騒ぎになる。もう、静かでいたいんだよ……」
そう語る彼女の瞳に、ランプの輝きが反射している。美しい、涙。悲しい、涙。
ずっと一人で、誰にもその苦しさを言えず、溜め込み……諦めていく。
届く場所に手が届かなくて。当たり前の幸せさえ、彼女は映してくれない。
「目にいく魔力を抑えて、見てみるといい」
言われたとおりにし……目を瞠ってしまう。
闇が纏わり付き、狐だか熊だか分からないシルエットが彼女を覆っている。もはや人としての原型はなく、常闇を纏っているかのようだ。
彼女はそれを見て、悲しそうに目を伏せる。
「……そうだ。お前ももう行くといい。こんなおぞましい輩に付き合っても得がないだろう。ああそうだ、勇者なのだろう？　ならば、私を討て」
ある種の清々しい表情を浮かべ、彼女は手を広げて、迎え入れる仕草をしてみせる。
「お前になら、構わん。もう疲れた、休ませてくれ……」
立ち上がり、彼女はそっと目を閉じた。これは……好機？

「それじゃ……」
すかさず近寄り――――その長袖のローブを一気に翻した。
「わーお！　レースの白！　可愛いパンティーちゃんっ！」
彼女は顔に青筋を立てつつ、何かを必死に堪えているようなトーンで質問を投げ掛けてきた。
「何を……やっとるんだ、お前は」
「何って？　俺がここに来た目的だけど？」
「……経緯を話してみろ」
「ここに合法ロリがいるって言うから、パンツを拝み、出来れば頂戴しようかなあと……ぐふふ、いやらしいですな！　レースだなんて！」
「お・ま・え・はぁ……！！」
「ほぶっ！？」
白い綺麗な足の膝を顔面に貫い、倒れてしまう。痛い。でも、僕、満足！
「勇者ではないのか！？　ここで悪を挫くのが、勇者では――」
「――悪って、何だよ」
そう、腹が立つ。
「勇者が悪を挫くのは定番だわな。でもよ、悪ってなんだ？」
分からないのだ。正義とか悪とか、そんな観念が。
「例えば貧しい少年はパンを盗んだ。逃げ果(おお)せた少年は、貧しい子ども達にそれを分け与えた。子ども達から見れば少年は正義の英雄だし、パン屋から見ればつるし上げたい悪者だ。明確な基準なんてないし、それでいいんだよ」
「だが、私は魔女で……」
「処女なのに？」
「い、言うな！　と言うか、何故知っておる！」
「まぁまぁ。呪いなんて、どこ吹く風さ！　きっと、風が解決してくれるだろうよ！」
飄々と受け流す俺に、とうとう怒ったのか、可愛い顔を吊り上げ

て、彼女はまくし立ててくる。
「お前は……！　お前はなんなんだ！　私の過去を聞いた、醜い姿も見た！　なら、何故そうしていられる！」
「――同情でもして欲しかったのか？」
「な、なんだと……？」
「ああつらいねー、大変だったねーとか何とか言って、抱き寄せてやれば満足だと？　ほざけよ、婆さん。俺は俺がしたいように行動してるんだ、アホ臭ぇんだよ」
「……それ以上言ってみろ！」
怒りの形相で、感情のままに膨大な魔力が型を為す。輝きは膨張して溢れ、勢いとなって家内をめちゃくちゃにしていった。
「俺はな、目の前にいる女の子を口説くのが目的なんだよ！　過去とか醜い姿だとか、そんなもんで混ぜっ返すな！」
「な、なに……？」
急に輝きがしぼみ、間抜けな声を彼女は漏らす。
そこですかさず、ウィンクを投げてみた。キラッ☆と。
「俺のハーレムにならないか！？　ぜってぇ、損はさせねぇよ！」
堂々と言い放った俺を、何故だか彼女は呆けて眺めていた。
――ふむ、ダメだったか。なら、最後にもう一度、あの白を目に焼き付けておこう。
「紡ぎ、払え。展開するは堂々たる緑。悪しき思いを風に乗せ、打ち上げろ。天へと誘う破邪の清風！」
少しひんやりとした風が上昇気流となって、思いっきり裾を持ち上げ、少し膨らんできている胸元辺りまで服をたくし上げた。うーん、絶景哉。
「いやー、ご馳走様です」
「……ど……ど……！」
彼女の呟きによって、緑色の輝きが目の前で収束し、
「どこかに行ってしまえぇえええ――――ッ！！」
「ありがとうございまぁあああああ――――すっ！！」

叫びによって放たれた魔術によって、俺の体は砲弾のように家をぶち抜き、泉へと飛んでいったとさ。

命令を受けていた騎士たちは、勇者キルシュが敗走したと見るなり、小さな家屋へ突入する。
「あ……っ！？」
そこにいた少女は、何かとてつもなく怯えていた。多分、あの変態勇者に何かされたのだろう、可哀想に。
「大丈夫かい？　あの変態勇者のことは、犬のフンでも踏んづけたと思ってくれればいいよ」
「フンだけにって？　お前、全然笑えねぇよアホか」
「そんな意図ねぇよ！？　つか、オヤジじゃねぇ！」
「それこそ言ってねぇし。そういやお前幾つだっけ？」
「三十五」
「オヤジじゃねぇか！　何見栄張ってんだよ」
「あ、あの……」
「うん？」
「あなた、魔力は……」
変な事を聞くものだ。騎士は、魔力を持たない者がなれるのに。魔術騎士は気取った格好をしているが、俺たち騎士は実戦的な鎧装備で臨む。昔の人間でなければ、一目で分かるというのに。
「そんなものないよ。そんなことより君も、こんなところにいちゃ危ないよ？　魔女が出るって噂だからね。その魔女はいないみたいだけど、君……知ってる？」
「し、しらない……」
「そうか。それじゃあ、気をつけてね」
――すぐにこの事を報告しなければ。
だが、気になったのは……あの少女が何故か、涙を流して、愛しそうに壊れた窓を見つめている事だった。

「ふーん、そんな事があったんだー」
エトワールは話半分にその事を聞きつつ、ミートスパゲティをほおばっている。
ミートソースを指で拭ってやりながら、泉でびしょびしょになった服を着替えた俺が溜息を吐いた。勿論、恍惚の。
「あの白い肌に脚線、幼児体型ってのがまたツボだったんだがなぁ……」
「それにしても、同志を置いていくなんて……酷いわね」
「だから、奢ってんじゃんよ。ミートスパにコンソメスープ」
流石に俺も腹が減り、今はラーメンを食べている。何か異国の食べ物らしいが、美味いので細かいことは気にしていない。気にしちゃいけない。
「で、その闇の力ってなんだったの？」
「ああ……最近まで解除方法がなかった、呪いの魔術だよ。多分、闇属性の魔術に巻き込まれた時、その悪意が闇を寄り代に関係のないヤツにまで触れたんじゃないか？　闇は、金属よりも質量があるからな」
「どうやったら解除できるの？」
「並の術者には出来ない芸当。根本から、その呪いを高純度の魔力で吹っ飛ばしてしまえばいいんだ。魔力が高い相手に対して、高純度な魔力を編んで放つってのは、ほぼ確実に無力化されっからな。だから、限界にまで極めたものをぶつけるしかなくなる。水は集めると圧殺しちまうし、だから風を選んだわけ。清水の方が簡単だけどな」
「なるほどね。だから、泉に落ちたとき、動けなかったんだ」
「そう言うこと」
黄色い麺を啜っていると、更にエトワールは尋ねてくる。
「ねぇ、結局は骨折り損じゃない？」

「そうでもねぇよ。俺は一人の女の子を導いた。それに……」
「それに？」
「ちゃんと、元も取ったからな！」
笑顔で俺が掲げたのは――純白のレースパンティー。

魔の森で悲鳴染みた少女の声が響いたらしいのだが、それはまた別の話である。

二章　村長の娘とブルードラゴン　前編（前書き）

魔術の設定と解釈が凄まじいのは、これの話元が凄まじい魔術ものだった名残です。

二章　村長の娘とブルードラゴン　前編

「……姫への親書だぁ？」
数日経ち、呼び出しに応じた途端にこれだよ！　少しはねぎらうとか、そんな感じの優しさとかは見せてくれないのかねぇ。
思いつつも、レターセットを受け取り、しかめっ面を作る。
不自然に感じたのか、王は首を傾げていた。
「どうしたのじゃ。お前は女の子大好きじゃろ、しかも姫じゃぞ？」
「あのなぁ……。姫様とか一般の奴らは憧れてるけどよ、だいたい食っちゃ寝してるんだからデブでブスしかいねぇんだよ」
「お前……国民の夢を粉々にぶっ潰しおってからに……」
「つーワケで、俺はノーサンキューな。ここの姫なら可愛いってメイドさんも言ってたし、会わせろよ～」
「ダメじゃ。……ほれ」
「ん？」
一枚の絵を受け取った。写し絵と呼ばれる、姿をそのままにモノクロで写す魔法のような箱で作るらしい。
見たのは、絵本に出てきそうなメルヒェンな容姿の美少女である。髪がさらさらしてそうで、その上ロングで、ロリなのにいい感じのスタイルで、微笑が実に優しそうで……バッチコイ！　ストライクですよ奥さん！
「これが姫様か！？　ちょ、どこの姫様だよ！」
「聖アバラスタ王国じゃ。兄と妹がおって、兄のメルクリーオは類まれなる弓の才能を持ち、彼女――メルキュールは光と癒しの魔術を使うぞ」
「ンな事ぁどうでもいいんだよ！　可愛いか！？　年齢は！？　これはいつ撮影したモンだ！？　三行で答えろ！」
「ごらんの通り可愛くて、
十四歳で、

一月前に取られた、
凄い写し絵じゃ」
「四行じゃねぇか！　どこかで見たような答え方しやがって……！」
ともかく、羽根ペンを心のままに走らせる。不安定な場所で書類を書くのは馴れているので、王も何も言わない。
手渡したそれを見て、王は硬直した。
「……読み上げて良いか？」
「おう」
「拝啓。当方、エメラキスカ勇者と任命されし、キルシュと名乗る者。寡黙な王に代わり、私がペンを取らせて頂く事を先に御了承頂きたい」
「いい感じだろ」
「それも驚いたが、これからが問題じゃ」
咳払いし、王は続きを無表情で読み上げていく。
「不躾ながら、単刀直入に申し上げますと、エメラキスカとの友好条約を御検討願いたく思っております。願わくば、あくまで対等な条件下において、互いの健勝を支援する形を。仮に承諾した前提として続けさせて頂きますが、条約締結の会議につきましては、そちらの空いた時間で結構です。決まりましたら、早めに書をお届け願いたい所存で御座います。色よい返事を、お待ちしております。……」
「拙いのか？」
「やれば出来るではないか！　何故、この手紙の誠実さを普段の生活に活かさんのだ！」
「馬ッ鹿野郎！　このギャップがいいんだろ！」
「いや、お前の言っとる事は微塵も理解できん！　そうやって真顔でいれば、絶対にモテるはずなのじゃがな……」
「上っ面しか見てねぇヤツを口説く気はないし、俺も本性を晒さないで口説く気はねぇ。互いが互いに合意した上で、俺は口説くね。それがルールだ」

「でも、やっている事はナンパじゃろう」
「まぁな！」
――これが俺の生き様よ！
と、王は仕込んであった二枚目の手紙を見つけたらしく、それを見て――噴出した。
「な、何じゃこれは！」
「いや、俺の率直な思い」
「私の白い思いを生まれたままのあなたへぶつけたい。そして、あなたと……合体したい！？　こんな文面があるか！　これは焼却処分するぞ！　と言うか気付いてよかったわい……確実に戦争になるじゃろ、これ」
「ヘイヘーイ……」
不満を垂れながらも、俺は内心でガッツポーズを取る。それは囮だ。
知らず、王は封筒にそれを入れ、控えていたメイドに渡した。計画通り……。
「んで、用ってこれだけ？」
「これからが本題じゃ」
「あー俺唐突に用事思い出したー。これから街中で日課をしなきゃならないんだー」
「まぁ聞け。ある村で魔物による被害があってだな」
「駐屯騎士にどうにかしてもらってくれ！　魔物討伐とかメンドそうで汗かきそうな労働はノーサンキュー！」
「……お前を農民にしたら半日で発狂しそうじゃな」
うん。俺、虫とか超嫌いだし。何アレ意味わかんない何で生きてんの馬鹿なの死ぬのアレが好きなやつなんなの？
「飛ぶ虫がさぁ、嫌なんだよねぇ。蜂とか、蛾とか。バッタとかマジで飛んでくるなって言いたいぜ」
「それだけなら良いじゃろうに。健気に生きておるのだぞ？」
「人間ってのはそれ以外の種族を受け入れられるほど、心が広くね

ぇよ。同じ人間同士で争ってんだからな。犬とかを友達だとか抜かしてるヤツも、救われねぇよ。餌を与えているって上からの立場で見ている限り、どう足掻いたって対等じゃないのにな。服を着せてあげる、何かをしてあげる、とか、自分が必要な存在なんだと自分に思い込ませてんだろ？　無意識下でさ、保守的になっちまってる」

「……ドライじゃな」

「ありのままを言ってるんだ。んで、却下だ却下。騎士にやらせろって。それがあいつらを必要としてる理由で――」

「――ドラゴンが出たんじゃよ」

出掛かっていた軽い言葉が、止まってしまう。

「色は？」

「……北の方から、ブルードラゴンがな」

「おおぃ！？　何で悠長にしてんだ！？　全国の騎士団呼び戻せよ！　この国が最悪滅ぶぞ！」

ドラゴン種族は、色で強さが別けられている。

グリーン、アッシュ、イエロー、ホワイト、ブルー、ブラック、レッドの順番だ。最弱のグリーンドラゴンでさえ、国の騎士が束になって掛かり、ようやく倒せるくらい。幼生なら一つの部隊でも済むかも知れないレベルで、結果、ドラゴンは一人ではどう足掻いても勝てないのだ。

ブルードラゴンにおいては、その氷の吐息と氷に覆われた鱗が戦闘を困難にしている。防御力は氷さえ避ければ最弱で、ある意味ではグリーンドラゴンよりも弱いが、総合的には光線を放つホワイトドラゴンよりも強い。

ぶっちゃけ、ムリ！　て言うか、逃げたい！

「やだやだ！　ドラゴンと戦うなんてやーだー！」

「駄々っ子かお前は！？　国を捨てて逃げるわけにもいかんだろ！？」

「俺は逃げる！　アホ兄貴と違って、俺は命が惜しい！」

「……その村にはな、可憐な娘がおって、それは村長の娘なんじゃ

が」
「ぐっ！？　……だ、だけどな、俺は……」
「その娘がまた、純情でなぁ～。十六歳とは思えないプロポーションでありながらも童顔で……。その子は村と共に心中する覚悟だそうなのじゃ。きっと、ドラゴンから村を救えば、惚れるじゃろうなぁ～！」
「おいおい、ドラゴンが何だって？　この超勇者キルシュ様に任せれば、一人でもちょちょいのちょいさ！　ハーッハッハッハ！」
　王も、城のメイドも、衛兵も、何故だかこちらを驚いた目で見ていた。うん、今までギャグで受けていたんだろって思ってたんだろうね。だけど俺はいつも本気だぜ！
「……頼んだワシが言うのもなんじゃが、騎士団を付けるぞ？　それから、魔法書もいるじゃろう」
「本だけでいいぜ。……別に、炎を使いたくなかっただけだしさ」
　王が用意させた本の中から、紅い装丁の本を一冊手に取る。
　魔法――魔術とは違う、強力無比な代物だ。
　古代魔術よりも、ある種絶対的な力を持つもの。これを魔法書なしで使う、魔法使いが昔に存在していたらしいのだが、今では考えられない事だ。
　この魔法は『聖炎・メギドフレイム』が記されている。これを触媒にして詠唱し、後は魔術と変わらない。
　扱うには資格が要る。魔術の素養は勿論、何か特別なものがいるらしいのだ。それは心だとか言うが、結局のところ、判明していない。
　個人的な説だが、多分書物に魔法ごと封印された精霊が認めた者だけしか、行使できないのだろう。いや、多分だが。
「……なぁ、追い払うだけじゃダメか？」
「わが国に被害が及ばなければ、どうでもよい。お前の好きにしろ。村はここより北にある隠れ里だ」
「サンキュ」

ウィンクを王へ投げ掛け、窓を破壊して飛び立つ。
「……何故、壊したのじゃ」
あてつけだよバーカ。

話をすると、エトワールも付いて来てくれる事になった。ドラゴンが見たいとか何とか言っていたが、軽いなオイ。
「ドラゴンだぞ、ドラゴン！　ビビれっつーの」
「だって、所詮、硬くて大きいだけの爬虫類でしょ？　飛ぶけどね」
止めろ！　ファンタジーの難敵をそんな風に言うのはやめろ！
台無しだろ色々と！
「ブレスだって半端じゃないしな。そんなドレスでいくのか？」
「今日のドレスは紅いでしょ？」
「三倍早く動けそうだし、そうで当たらなけりゃどうと言う事はないんだろ？」
「そうそう。それに、いざとなったら守ってくれるでしょ？　ね、勇者様？」
悪戯っぽく微笑んでくるエトワールに笑みを返し、街道を歩いていく。
北の村は知っている。他との交流は拒んでいるが、唯一、エメラキスカとの交通に応じている要所だ。ドラゴンが出たなら村は破棄すべきだが、そう言うわけにも行かないらしい。
かなりの傾斜を登った先にあり、高原に加えて天然の牧草地帯でもある。普段は、馬などを飼っている女の子達がいるのだが、流石に今は人っ子一人いなかった。
「……許せねぇな」
「やっぱり、勇者として？」
「一人の男として……牧場ガールの属性も抑えておきたいのに！
畜生、ドラゴンめ！」
「ああ、やっぱり……」

ちょっと強い風に吹かれて民族衣装を翻す可愛らしい女の子達の姿が見れないだなんて！　しかも、おおらかで元気な子が多くて、お気に入りスポットだったのに！

ああ、何か腹立ってきた。

「魔法でここら一帯灰にしてやろうか……」

「そもそも、魔法ってどんなに威力があるの？」

「……んじゃ、見せといてやるよ。はぁーあ、ちょちょいのちょいなっと！」

適当に呪文を口ずさみ、水の結界を張る。周りの光を曲げる為、内部で起きている事象は見えない。

「斬ってみろよ」

頷き、エトワールはとんっ、と駆け出す。

何か煌いたかのような一閃の銀光が奔り、結界を真っ二つに切り裂いたようにもみえた。

しかし、結局は刃が水で阻まれ、動けなくなっている。剣を抜いたエトワールは、不思議そうに結界を眺めていた。

「凄いわ、これ。水が重くて、剣が進まない。相当の水圧ね」

「まぁ、この壁を今から炎で壊す。水は炎を消すんで、属性的には最悪だが……」

魔法書を手に取り、魔力を本に集める。

すると、足元に魔法陣が出現し、紅い燐光を立ち上らせる。目に映える深紅のそれが鮮烈に輝き、その美しさにエトワールは声を失っているようだった。

極度の集中状態に到り、キルシュは半眼のまま詠唱を唱えていく。

「黙示録に記された、鮮烈なる紅よ。我という法を害す輩へ、裁きの炎を召したまえ。願わくば、どうか安らかに――」

その輝きが払われた手のひらに収束していくのを確認して、それを握りつぶした。

「……やめた、アホらし」

水の結界も弾けて、消えてしまう。

エトワールは文句を言おうとして、思わず口を閉ざしてしまった。
普段、すけべな妄想で緩んでいた俺の表情が、やたら渋く歪んでいたからなのだろう。
「……お腹、痛いの？」
「そんな間抜けな表情に見えたかい！？　メッチャシリアスだったじゃん！　台無しだよ、今の一言で全部！」
「ごめんなさい。でも……本当に、お腹が痛そうだったから」
「そんなしゅんとされると下手に怒れねぇし！　……あーったく、行くぜ！　さっさとドラゴンにゃ、出てってもらおう！」
ずかずかと俺は街道に沿って高原を進んでいく。
追って、エトワールは横に並び、更に質問を重ねた。
「結局、本気を出せば、魔法ってどれくらいまで威力が上がるの？」
「んー……そもそも、種類が二つあるんだよ。一つは、魔力耐久値の高い連中を殺していた魔法。魔法によっちゃ、戦士達にはまるで効果がないのもあるんだ」
「え？」
「要は精神的なものなのさ。例えば、思い込みで、何もないところで火傷をするって話を聞いた事があるか？」
「ええ。冷たい水の入ったやかんを触って、火傷を起こした話ね」
「それの強化版だ。魔力が高いのを逆手に取ったもので、対魔術師の兵器。魔術師はイメージや魔力で術の威力やらが変わるんだ。魔法によって強力な幻想を見せられ、それが自分の体に打ち込められるイメージがリアルなほど、自分は余計に傷つく。中には、魔力を握りつぶすイメージがあって、それをまともに見ちまったら……もう、魔術師でいられない。つまり、死ぬんだ。魔術師を裁く法の書って意味で、魔法書――それを縮めて魔法ってするのが一つ」
二本立てていた指を、一つ折り曲げる。
「もう一つは、対魔物用で純粋に威力を特化した代物だ。これがそれに当たるな。人間には耐えられない魔力の行使を、書物が手助けしてくれる。だから、通常では考えられないほどの威力が出せる。

武器で言うなら、大砲みたいなもんだ。魔術を超える存在として、魔砲って言葉が出てさ。めんどくさいからって、魔法に一括統合されたわけ。正式には、これは魔砲書と言う事になる」
「……さっぱり分からない事が分かったわ」
「要するに、俺は今、炎の大砲を持ってるってわけ。それこそ、あの村が一瞬で消し炭になるレベルのな」
扱う人間の魔力次第だが、俺の炎の才能を持ってすれば、城くらいは一撃だ。それだけに、駄々長い詠唱に加え、莫大な魔力を持っていかれる。二発も撃てば、もう魔力は空になるだろう。実は、俺はそんなに魔力があるわけではない。コントロールを極め、無駄なく使っているだけに過ぎない。
「んじゃま、行ってみっか！」
「そうね」
意気揚々と、無理やりテンションを上げつつ、その村へと入っていくのだった。
が、そこには凄まじい光景があった。
「頑張って、ドラゴンを追い払いましょう！」
「おおーっ！！」
村人達が、精一杯の武装をして、集まっていた。
防寒具の上から軽鎧を纏う何人かがいて、槍や斧、農耕具を手に、一人の少女の下へ集まっていた。
「おお……」
「凄いわね。ドラゴンにあの人数で立ち向かおうなんて……」
「いいおっぱいだな、素晴らしい……」
「ああ、そっちね。確かに、大きいわ」
あれが噂に聞いた村長の娘だろう。ダークブラウンのロングヘアに、可愛らしい顔、低い背に似つかわしくないプロポーションが危なげな魅力を放っている。
うん、ストレートに言おう。メッチャタイプです。
「ねぇねぇそこの彼女〜！　ドラゴンなんかやめて、俺と愛の狩り

に行かないか～い？」
「えっ！？」
全員が――いや、特に男からの殺気が殺到する。見つめちゃいやん！
「あの……もしかして、勇者様ですか？」
「そそ。あー、そこのブ男諸君。これから俺の言う事に従ってくれ」
「ああ〝っ！？　勇者だが、貴様はよそ者だろう！　誰が貴様などに従うか！」
「そうだ、我らには誇り高き使命が――」
「あそーれ！」
その一言で、急に上昇気流が発生し、ぽかんとしていた村長の娘さんのスカートが持ち上がる。
気付いて必死に抑えるも、時既に遅し。普通の水色だったな。横の端の結び目がエッチで堪りません。
呆然としていた男衆だったが、急に色めき立ち、俺の前へと喜色満点の笑みで集まってきた。うんうん、人類皆スケベ！　スケベは全国共通概念だねぇ～！　そう思わないかい？　お前も！
「勇者様だ！　勇者様を御崇めしろ！」
「素晴らしい！　流石は勇者様だ！　従うしかあるまい！」
「ちょ、ええええっ！？　み、みなさん！？　ど、どうしたんですか急に！？」
欲に忠実で実に素晴らしい方々だ。憧れだった分、見れた物の価値も高いのだろう。
「勇者様！　お、おいらはもっと上のほうが見たいんだ……！」
「馬鹿野郎！　これを見ろ！」
再び巻き起こる上昇気流。それを恥ずかしがりながもスカートを抑える娘さん。
「恥ずかしがりながら健気に隠そうとするのがいいんだろ！　しかも、事実ギリギリ見えてるところがグゥーッド・イナァフッ！！
パンモロは違う、パンチラが見てぇんだよッ！！　そうだろ！？」

全員に電撃が奔っていたようだ。中には妻帯者もいるらしく、奥さんからぶん殴られていたが、それでもこちらへの尊敬の眼差しが集まってくる。
「ゆ、勇者様……！　お、おいら間違ってたよ！」
「どうか、どうか私達にその極意をお教え下さい！」
「殊勝だな、嫌いじゃないぜ。あのな、男ならベッドの上で、彼女にスカートをたくし上げさせるのが最高なんだ。こう、潤んだ瞳で……恥ずかしさと男への好意の狭間で揺れてるってのがな、またミソなんだよ。で……」

素晴らしいエロ説法を行い、男達全員を手中に収める間、エトワールはペタリと座り込んでしまった村長の娘さんに声を掛けていた。
「彼ね、悪い人じゃないの。でも、ビックリしたでしょ？」
「え、ええ。村の人が、あんなに他所の人を嫌ってたのに……勇者様の人徳なんですね！」
「……貴女、純朴ねぇ」
目をキラキラさせて、キルシュを見る瞳。それは『そんけーのまなざし』そのものである。
「勇者様なんて、初めて見ました！」
「あれ、この村にもナンパしに行ってたんじゃ……？」
「……ああ！？　そう言えばあの人、前に来てました！　すっごい真面目な人なんですよ！　この村とエメラキスカとの交流があるのも、彼のおかげなんです！　彼とお爺様が仲良くならなかったら、絶対にムリでしたもの。そっかあ、勇者様だったんだぁ……！」
「嘘！？　彼が真面目だったら、世界人類皆真面目でしょ」
「ホントですよ！　あんなにチャラいのが嫌いで頑なだったお爺様が、何故かすっごく機嫌を良くしていたんです！　『あやつほどの理解者はそうおらん』と言って、鼻歌まで歌っていたんですよ！？」
「……何の理解者か、教えてもらった？」

「いえ。お前にはまだ早い、とか言ってましたけど……」
「あー……なるほど」
前屈みになりつつある男達を眺めながら、エトワールは仕方なさそうに溜息を吐いた。

二章　村長の娘とブルードラゴン　後編（前書き）

シリアスじゃん！　とかいいつつ、シリアスになってない。
ようやく冒険が始まりそうで、まだ始まらない。

二章　村長の娘とブルードラゴン　後編

「諸君、いいか？　この伝統衣装の属性を守るために、一時的に避難しておくんだ！　ドラゴンは俺が何とかする」
『はい！　勇者様！』
「すぐに戻るとは思うが、もしもの時は王に俺の名前を出してくれ。然る処置はしてくれるはずだ」
「……お、俺も、やっぱり一緒に……！」
「馬ッ鹿野郎、お前が死んだら……その後ろの子に、何て言えばいいかわかんねぇし、恋する乙女を口説く事ぁしねぇよ。……彼女に笑顔を作ってやれ」
「は……はい……はいッ！　勇者キルシュ様！！　絶対、戻ってきてくださいね！　気絶している村長共々、お待ちしております！」
感極まって涙を流す者や、悔しそうに歯噛みしつつこちらを見送ってくる者で草原はむさくるしい相貌だ。いや、女性のほうが多いのだが、何故か微妙な視線を向けられている。何で？
「おーい、エトワール！　行くぜー？」
「待ってキルシュ。この子も連れて行くわ」
と、そこにいたのは村長の娘――確か、メロウと言ったか。
「おいおいおい。こんな純情可憐なお嬢さんを戦場にまで引っ張ってくるな」
「あら、私だって可憐よ？」
「そうだけどさぁ……」
――アンタ、俺より強いじゃん。
そんな言葉を続ける間に、メロウは頭を下げてきた。
「お願いします！　私、何でもします！　お手伝いがしたいんです！」
「……なら、さ。シチューでも作って待っててくれよ。それと、宴の準備。出来れば、君の手で作った料理が食べたいんだ」

「え……？」
「ありゃ、帰りを迎えてくれる美少女ってのが、勇者にとっての一番の報酬だろ？　君はその役に一等相応しいんだぜ？　それに、魔法でこっちに流れてきた弱い魔物を任せるんだし、男衆は疲れる。だから、それのサポートに回って欲しいんだ」
「……でも！」
あーあー、美少女に冷たくしたくはないんだけどなあ。
でも、ここで死なれるよりは……ましか。
「あーもう！　邪魔なんだっつの！　アンタがいて、戦闘に何のメリットがある？」
「そ、それは……」
「精々俺のテンションが上がるだけだが、俺は無力なんでね！　アンタを守りながら戦うなんてヒロイックな事なんざ出来やしねぇ！　なんせ勇者（笑）だからな！　ハッキリ言えば、アンタの好意は邪魔で、酷く鬱陶しいんだよ！」
「……っ！？」
「無能なら無能らしく、指をくわえて待ってりゃいいんだよ！　……あー、アホくせえ」
ずかずかと大股で進んでいく。あんなに、ショックで歪んだ顔なんて……しかも、俺がそうさせたなんて、見たくない。心が痛むのは、俺が弱いからだ。
守れるほどの余裕があればよかったのだが、そう言うわけにも行かない。ホントはエトワールにだって付いて来て欲しくはなかったが、剣士無しでドラゴンに向かうのは無謀。
（兄貴みたいにゃ、いかんな……）
何でも一人ではこなせない。だから、俺は勇者じゃないのだ。

エトワールはしばらくその場に残っていた。
泣いている村長の娘と、それを励ましている女性陣の話が、酷く

……頭にきたから。
「ほら、メロウ。泣かないで！　あんな変態の言う事なんて、気にしちゃだめよ！」
「そうよ！　それに、あんなのがドラゴンなんて倒せるわけないじゃない！　私達も行くわよ！」
が、男性陣がそれを引き止める。
「止めとけって！　あの人が何で僕らを止めたのか、わかんないのかよ！」
「どうせオーバーに言ってるだけでしょ！　それに、あんたらだってスケベ話に花咲かせてたじゃない！　気持ち悪いわね！」
「じゃあ、あの人が死んでいいのかよ！」
「当たり前よ！　勇者ってのは、国のために死ぬモンでしょ！　だから、あんなヤツも死んで当ぜ――――」
堪えきれずに、エトワールはその女の顔面を殴っていた。軽く、五、六メートルは吹っ飛び、辛うじて気絶はしなかったらしい。起き上がっていた。
周囲の女性が敵意の視線を向けてくるが、全員眼光で捻じ伏せる。
「こんなのが避けれないのね。見えもしなかったでしょ？　装備も貧弱、脳も貧弱、身体能力はもっと貧弱……そんな連中が三十人集まったって、ドラゴンは愚か、私にだって勝てないわね」
「そんなのありえないわよ！　なんなら――」
言った女を蹴り上げて、空中に打ち上げた。他の連中が抱きとめるのを確認して、続ける。
「不意打ちが卑怯だとか言うつもりだろうけど、魔物が待ってくれるかしら？　攻撃する前に攻撃しますよーなんて間抜けな事、言わないでしょ？　ドラゴンはね、そんな次元を超えてるの。不意打ちなんて当たり前よ？　そうしなきゃ勝てないもの」
「……じゃあ、アンタなら勝てるの？」
「ムリね。グリーンは倒したけど、あれだって名のある傭兵と三十名の騎士アタックチームでようやくだもの」

「なら、あんなヤツが――」
「でも、貴女より顔も良いし、貴女よりずっと強い。不細工って、心まで醜くなるものなのね。一つ勉強になったわ」
エトワールは、涼しい顔をして、悪口を言っていた全員を殴り倒していく。
「……なんであんなに彼が開けっぴろげか、知ってる？　本当の自分を晒して、知って欲しいからよ。自分の本性をさらけ出すのって、怖いわよね。受け入れてくれなかったら？　周りから弾かれたら？
そのリスクが目先にいっちゃう。当然、人と違うから……今みたいに弾かれるわ。でもね、いい事もあるのよ」
残った人物達に、エトワールは優しく微笑んだ。
「私が本当の自分を晒しても……受け止めてくれるんだから。私って、可愛い男の子やイケメンの下半身を見るのが好きな、変態だってのも受け入れてくれたしね」
言って、彼女は駆けた。
話に夢中になっている際、可愛かった女子の下着を掠め取り、男子全員の服をさりげなく刻んでおいたのは、内緒だ。うほッ、いいバナナ！

「遅いぞ！　さては……シリアスな話してたな！　ここでシリアスは御法度だろ！　何してんだよ！」
「大丈夫よ、最後にさりげなく混ぜっ返したから。はい、お土産」
「お前最高だな！　マジ愛してる！　ほら、とっとと行くぜ！」
下着を手に、るんるん気分で進んでいく。
――まぁ気合入れないと、初見で死んじゃうし。
ちなみに、ドラゴンと戦うのは初めてじゃない。何度かホワイトドラゴンの幼生を叩いた事がある。
「死ぬかもしれないわね……」
「なぁに、イケメンってのは何でか早々死なねぇんだよ。組み掴ま

れて自爆されたはずなのに生きてるイケメンだっているしな」
「それ何の話？」
「いや、友達同士だったんだけど、ふとした切っ掛けで敵同士になり、最後には手を取り合って平和を掴むって話。ありがちだろ？」
「そういえばそうね。そこで死ぬのは大抵、捨てられたヒロインとオッサンキャラだものね」
「しかも続編が作られたら、だいたいオッサンは復活するんだよな」
ストーリー展開では非常にありがちで、また熱い展開なのだが、明らかに死んだ人物を生き返らせると醒めるんだよな。難しい匙加減だ。
歩いていると、木で出来た床が高い建物が見えてくる。それがぽつぽつあり、畑に井戸と村のレベルとしてはそこそこの場所を通り過ぎた。
奥の山道を行くが、そこからは冷たい空気が流れ込んでくる。年中温暖なエメラキスカも高所であるここは涼しいが、これは平時の寒さではない。
「……寒いな。ちょいと待ってろ」
白い息を確認して、魔術へと集中する。炎系魔術は使いたくないが、これは例外だ。
「灯し、纏え。……温む日差しの羽衣」
急に、周囲の温度が上がる。普通に活動するのに、適切な温度へと。
エトワールは顔を綻ばせ、手を振っていた。多分、動いても持続するのかどうか確かめたのだろう。
「どうよ？」
「うん、ありがとう。暖かいわ」
「……多少離れても効果はあるが、五十メートル離れたら俺からの魔力供給が途絶えるからな」
「難しいわね。……ドラゴンが幼生だと、助かるんだけど」
「まぁ、魔力の少ない固体だと期待しておこうぜ」

刹那――真横に青い気体が猛スピードで流れていった。
咄嗟にエトワールが何かを差し出していたが、なんなのだろう。
とりあえず、周りの樹木は一瞬で樹氷に変わってしまった。
「……一発喰らったら終わりだな。で、エトワール。お前、何出してたんだ？」
「バナナ。凍ったわね」
「釘でも打ってろお前は」
カチンコチンに凍ったバナナを満足そうに持っているエトワールに呆れつつ、風上に向けて手を向けた。
「紡ぎ、払え。展開するは堂々たる緑――」
風の中級呪文を唱えつつ、気配を消す。
この森だ。気配が消えればこちらは見えない。が、それはこちらも同じ。森林伐採はしたくないのだが、どうせ永久凍土になるのだ。今ここで、消し飛ばす。
「――殺到する疾風の群！」
豪！　と魔方陣から殺到する突風。
それらはばらばらに指向性を持たされ、しかしてそれは計算されつくしてある。つまり突風に加え、真空の刃を生む効果を得ているのだ。
刃を孕んだ風が辺りの木々を薙ぎ払うと、そこには傷つき、血を流す巨大なドラゴンの姿があった。身を伏せていたらしく、成る程、あれなら遠目でも見れないか。流石の知性である。
傷は――致命傷だ。しかも、痛みを強調するかのように、致命傷とは関係ない突傷が穿たれている。
「……お前、喋れるか？」
『……何だ、お前は』
「キェァァァシャベッタァァァァァ――――！！」
「気持ちは分かるがその言い方は止めろ！　気持ち悪いわ！　……どうしてブルードラゴンがここにいるんだよ」
ドラゴンは知能も高い。グリーンにはムリだが、他の竜ならば可

能だろう。いや、知らんけど。
息を極力抑えているらしく、ドラゴンは巨躯を動かさず、少しだけ鼻から息を吐き出した。
『フン……娘を探している。人間に化けたのはいいが、魔力がない為に竜に戻れない出来損ないがな。が、娘は可愛いものだよ』
「そうか、分かった。動くなよ……？　流れ、零れろ。展開するは壮麗たる蒼。天より授かる一滴、雨となりて降り注げ。……降り滴るは癒しの涙！」
言い終えると、大きな一滴がブルードラゴンの上空に出現し、弾けて雨のようにその体へと雨を降らせた。
傷に触れた瞬間、急速に傷が癒えていく。ドラゴン特有の自己治癒力も相俟ってか、あっと言う間に大きな傷は見えなくなった。
『……何故、助ける？』
「バーカ。娘を助けようとする親を、殺すわけにゃいくまい。目覚めも悪いしな。それに……人化した娘さんに興味もあるしな！」
『ほう……好色なヤツだな。いいだろう、我ら誇り高き魔族は感謝を忘れん。娘との交際を約束しよう。その代わり、自分で探し出せ。覚えていれば、一度会わせてくれ』
「よっしゃあ！　人化ドラゴンちゃんとイチャイチャ！　しかも親公認なんて神的シチュエーションをゲッチュできるなんて！　癒しの魔術習っててよかった～！」
最高！　超っ最高！　もうヤバいテンションが鰻登りで何言ってるか意味不明だけど最高！
なぞの踊りを披露していた俺を、急にエトワールが足払いで転ばせた。痛い。
文句を言おうとした刹那に、投げナイフが地面に突き立つ。危ないって、あああああああああっ！？　さっき貰ったパンティーちゃんたちが串刺しに！？
て言うか、これ貴族御用達のノーブルナイフじゃん。誰だ、こんな実用性がなくてただ高いだけのものを使う馬鹿貴族は。

「おいおい、避けちゃうのかい？　そりゃあ困るなぁ～」
遠く見上げれば、影。
紳士服に金髪の、やけにニヤついた男。ひょろ長いが、痩せているわけではなく、その実引き締まった体つきをしていた。
「御機嫌よう、勇者キルシュ。そして見慣れないお嬢さん。僕の狩りを邪魔しないでくれるかなぁ？　折角、この親の子どもを逃がしてあげたのに」
オカマのような声音。木の上でそう笑う男に、俺は憤りを覚えずにはいられない。
「テメェ……！　何で男なんだよ！　そこはセクシーで危ない魅力があるお姉さんが来るシーンだろうが！　お呼びじゃねぇんだよ！
俺のドキドキを返せ！」
「か、彼は何を言ってるんだい……？」
「そう言う人なのよ」
「で、その子どもをどこに逃がした？」
「ああ、聖アバラスタの方にね。後で追いかけて、じっくりいたぶって殺してやるんだ」
「あっそ。紡ぎ、裂け。駆け抜ける風の刃！」
瞬時に唱えた風の初級呪文だが、男の前で霧散する。結界か。
「どんな呪文でも、僕には届かない！　このマジックガードは、中級術すらも無効化する素晴らしい道具――」
「――んじゃ俺が貰おうか！」
跳んで、その呟きで魔術を発動させつつ、距離を詰める。
「な、何故……！？　勇者に盗むスキルなんて……！？」
「俺さ、盗賊の心得持ちだから」
その時間は僅か二秒。急な加速でちょっと苦しいが、見事に掲げていた緑水晶を奪うことが出来た。忘れてたかい？　俺も最初はネタだとばかり思ってたよ。
「んじゃま……そうだなぁ、使いどころなかったし――使っとかないと、鈍るしな」

「え？」
「詠唱中略。二倍の魔力もっていけやぁぁぁぁ――――っ！！」
――詠唱破棄。身のうちにあるありったけの魔力を代償に、使用可能な魔術・魔法を無詠唱・無動作で発動できる荒業である。
発動したのは『聖炎・メギドフレイム』。断末魔さえ残してもらえず、彼の命はこの二十行目で散るのだった。
真っ白な輝きは男を飲み込んでも、嫌な匂い一つ発さない。まさに、清い炎。公平に誰もが焼失してしまう。
「……」
残り火を見て吐き気が来るが、堪えておく。もう馴れておくべきだ。火は、攻撃力のある魔術だ。使用不可能になるのは、困る。
「……火が、嫌いなの？」
「ああ嫌いだね。……大ッ嫌いだ」
「大切な事だから？」
「二回言ったんだ。じゃな、ブルーママドラゴン。略してブルマ」
『ドラゴンが行方不明なんだが！？』
妙に的確な突込みを聞きながら、もやもやしつつ山を下る。……ムラムラじゃないよ？

「ドラゴンを殺さなかった！？」
「ああ。そのまま北に帰って貰うことにした」
村人達の驚愕はさておいて、もう疲れた。最後の魔法が体にきている。もう寝転がりたい。
「魔物を倒すのがあんたの仕事でしょ！　しっかりしてくれない！？」
「あー？　信用してなかった癖して、良く言うぜ。俺を嫌ってたのに、いざとなったら泣きつくのか？　せめて虚勢張ってろよ、性格もブスじゃ救われねぇな」
「なっ！？」

「そもそも、魔物を殺すってのはどうなんだよ。魔物からみりゃ、俺らが化け物だ。……頭の悪いお前らでも、分かるだろ？　話が通じるような魔物とは協力しといた方がいいんだよ」
渋面を浮かべる村人達の間を縫って、村長とメロウが近寄ってくる。
厳かな雰囲気の下、村長は険しい顔のまま、一言だけ呟いてきた。
「安心して、よいのじゃな？」
「ああ。同志を死なせたくないしな。あの性格ブス共はともかく」
「そう言うな。ある意味では、人間らしい。が、醜いのも然りじゃがな」
老人の眼光が村娘を射抜き、それだけで騒ぎ立てていた連中が静かになってしまった。流石の威光、やるじゃん爺さん。
「あ、あの……！」
「ん？」
差し出されたのは、美味しそうな匂いのするパン。そう言えば、石を積み上げた簡易の竈がある。
「シチューは道具がなかったので……パンにしました。あの……私たちのこと、あまり良く思ってないのに……何とかしてくださって、ありがとう御座います！」
礼を聞きつつ、差し出されたパンに銀の棒――いや、止めておこう。
そのまま齧り付く。……薬草が風味を良くして、浮ついた甘さをしっかり抑えている。美味しくて、飽きの来ない味だ。
「ん、いいって事よ。それに、俺は全美少女及び美女達の味方だぜ？　君みたいな子が助けを呼んでるなら、いつでも駆けつける。だって、ほら。俺、勇者だし？」
適当な返事を返しつつ、とりあえず彼女の肩に手を置いて、さっと立ち去っていく。

「ねぇ……」
「ん？」
「何で、銀の棒を？」
「あぁ……習慣だよ。信頼してねぇヤツから受け取った物には、当てるようにしてる。毒で変色するんだよ、銀は」
完全に村人達が見えなくなってから、草原を歩きつつもそう説明していく。
「それに、何であの人を殺したの？　結構、容姿だけならいい感じだったのに」
「いや、魔法の見せ場なかったし……」
「うわぁ……それだけの為に？」
「モチ、下着を台無しにして許せなかったってのもある。全てが重なって一つになり、それが冴えたやり方ってヤツになるんだよ」
「あの後、下着のお墓まで作ってたわね、流石に引いたけど。で、結局は無報酬なの？　あの娘の胸でも揉むのかと思ってたけど」
「報酬なら、貰ったよ。……あー、なんか限界くせえな。俺、しばらく寝るから。先行ってていいぞ？」
目蓋が重い上、これ以上歩けそうにない。
幸い、ブルードラゴンが去った事で、温暖な陽気に恵まれている。草原に寝転がり、目を閉じた。
風は温かい草の匂いと共に、綺麗な花のような香りも運んでくれる。隣に寝転んだ、エトワールだろう。
「私も、付き合うわ。いい天気だしね」
「ああ。平和ってのが……勇者の報酬さ」
そんな彼のズボンを見て、エトワールは苦笑した。
「……見えてるわよ？」

「勇者様……あんなパンだけで、よかったのでしょうか」
「いや、我が娘よ。ヤツは大変なものを盗んでいきおった」

「え……？」
「……お前の、ブラジャーじゃ」
「え？　……あっ！？」
だって欲しかったんだもん！　僕、満足！

二章　村長の娘とブルードラゴン　後編（後書き）

ＧＭＥＸＰ欲しいよ……。ガン〇ム、ガン〇ム……。
個人的にＸのディバイダー装備が好きです。ハモニカ砲が最高にカッコいいなあ……って、これファンタジーものだったよ。
ゼロ使が四期やるらしいですね。正統派はいいなあ、カッコいいし。
熱血書きたいよ熱血。

三章　儚い容姿のお姫様～ウホッ、もあるよ！～　前編（前書き）

キーワード：ル〇ズコピペ

三章　儚い容姿のお姫様～ウホッ、もあるよ！～　前編

聖アバラスタの王都、レイフォール。
王が崩御し、周りとの友好関係は白紙に戻っていた。
現在、どの国も静観している。国王である王家兄妹の兄――メルクリーオの手腕を見たいが為の行動だろう。
そんな中で届いた、一通の親書。なんと、大国であるエメラキスカからの書状だと言う。
「お兄様！　エメラキスカが友好条約を？」
「ああ、そうだ。メルキュール、これで少し肩の荷がおりそうだな」
儚い容姿をしているのだが、気が強く活発なメルキュールとは裏腹に、メルクリーオは寡黙で鋭い印象の青年だった。
メルキュールは歌と癒しの魔術、持ち前の明るさで人気がある。対するメルクリーオは年に似合わない風格と気品を備え、弓の腕はピカイチ。二人ともだが、少々天然ボケではあるものの、それもまた魅力の一つだろう。
今まさに、この国は彼らによって団結しようとしているのだ。
「で、何と書状を？」
玉座に座って書面を切れ目でさっと目を通し、メルクリーオは静かに頷いた。
「……ふむ、向こうの勇者殿は中々礼儀に通じているな。見てみろ」
読めば、丁寧な筆跡で字が描かれている。流れるような字体だが、雑ではなく、むしろ完成された絵画のような美しさと統一感を覚えた。
「字、綺麗ですね」
「ああ。書記に通じているとなると、かなり聡明な人物だろう。今までの筋肉ゴリラとは違ったタイプのようだな」
「き、筋肉ゴリラって……にしても、凄く丁寧ですね。若輩者であるこちらへ、上からでもなく、あくまでお願いする立場で……」

「好感が持てるな。ふむ、惚れそうだぞ」
「惚れちゃダメです男ですよ！」
「半分冗談だ」
「半分本気じゃないですか！？」
「……む？」
二枚目の紙を見つけ、何食わぬ顔でそれを見た後、メルキュールにそれを手渡した。
「お前宛だ」
「え？」
　書面を覗き込むと――――
『メルキュール！　メルキュール！　メルキュール！　メルキュールぅぅうううわぁああああああああああああああああああああああん！！！
　あぁああああ……ああ……あっあっー！　あぁああああああ！！！　メルキュールメルキュールメルキュールぅううぁわぁああああ！！！
　あぁクンカクンカ！　クンカクンカ！　スーハースーハー――――』
「うわぁああああああああああああああああっ！？」
　思わず書類を投げ捨て、飛び退いてしまった。――何、この怪文章！？　ほんとに同じ人が書いたのコレ！？　見ていられないよ！
　その書類を拾いなおして、メルクリーオはやはり真顔で言ってくる。
「最後まで見ろ。これほどの思いが篭った手紙を粗末にする気か？」
「何か恐ろしいものしか感じないですお兄様！　思いが重いです禍々しいです！」
「二度、同じ事を言う気はない。ほら」
「ううう……」
　意を決して、再びその文章に目を通していく。

『メルキュール！　メルキュール！　メルキュール！　メルキュールぅぅうううわぁああああああああああああああああああああああん！！！

　あぁあああ……ああ……あっあっー！　あぁああああ！！！　メルキュールメルキュールメルキュールぅううぁわぁああああ！！！

　あぁクンカクンカ！　クンカクンカ！　スーハースーハー！　スーハースーハー！　いい匂いだろうなぁ……くんくんしたいお！　んはぁっ！　メルキュールたんのさらさらした髪をクンカクンカしたいお！　クンカクンカ！　あぁあ！！

　間違えた！　モフモフしたいお！　モフモフ！　モフモフ！　髪髪モフモフ！　カリカリモフモフ……きゅんきゅんきゅい！！

　写し絵のメルキュールたんかわいかったよぅ！！　あぁぁああ……あああ……あっあぁああああ！！　ふぁぁあああんんっ！！

　お姫様になれて良かったねメルキュールたん！　あぁあああああ！　かわいい！　メルキュールたん！　かわいい！　あっああぁああ！

　三章目で姿を見れると思うと……いやぁああああああ！！！　にゃああああああああん！！　ぎゃああああああああ！！！　ぐああああああああああ！！！　姫なんて現実的じゃない！！！　う……写し絵もよく考えたら……

　と言う事はメ　ル　キュ　ー　ル　ちゃ　ん　は　現実　じゃ　な　い？　にゃああああああああああああん！！　うぁああああああああ！！

　そんなぁああああ！！　いやぁぁぁあああああああ！！

　はぁああああああん！！　アバラスタぁああああ！！

　この！　ちきしょー！　やめてやる！！　現実なんかやめ……て……え！？　見……てる？　写し絵のメルキュールちゃんが……僕を見てる？

写し絵のメルキュールちゃんが僕を見てるぞ！　メルキュールちゃんが僕を見てるぞ！　写し絵のメルキュールちゃんが僕を見てるぞ！！

脳内のメルキュールちゃんが僕に話しかけてるぞ！！！　よかった……世の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！

いやっほぉおおおおおおお！！！　僕にはメルキュールちゃんがいる！！　やったよエトワール！！　（夜）ひとりでできるもん！！！

あ、写し絵のメルキュールちゃああああああああああああああん！！　いやぁあああああああああああああ！！！

あっあんあああっあああんあメロウ様ぁあ！！　菫ぇえええええ！！

エトワールぅうううううう！！！　ドラゴンちゃあああん！！

ううっうぅううう！！俺の想いよメルキュールへ届け！！　聖アバラスタのメルキュールへ届け！』

涙目になっているメルキュールへと、メルクリーオは首をかしげた。

「どうした？」

「やっぱりおかしいですよお兄様！」

「そうか？　一途な気持ちではないか。オレはその志にいたく感動したのだが」

どうやら本気らしく、何度も文面を見返しては、うんうんと頷いていた。ええええええ！？　ここで天然振りを発揮ですかお兄様ぁあああっ！？

「こんなの絶対おかしいよ！　……と言うかこの三章目って何ですか！？　そもそも発想が病気ですよ！　たまに出てくるエトワールって誰！？　写し絵をどこで手に入れたんですか！？　妄想が行き過ぎてますよ絶対！」

「む……？　なら、本人を呼べばいい。おい誰か！　エメラキスカのキルシュを国王権限でここに招く！　速達で書を出せ！」

「呼ぶの！？」
終には敬語も忘れ、メルキュールはただひたすらに混乱の坩堝に嵌るのだった。

「――紡ぎ、昇れ！　悪戯好きな桃色の風！」
街中に吹き荒れる上昇気流。
スカートが現在流行している事もあってか、行きかう人々はスカートを押さえつつ、その下着を露にしていく。
瞬時に色を数えつつ、いい感じのお尻を見ては顔を緩ませる俺。
いいねいいねぇ！　最高だねぇ！
「おっひょ～！　今日は白三十二、青と白のストライプのレア柄が三枚、バックプリントが二枚、ピンクが十二枚か……赤が減ったな」
――そして俺の息子は、今日も元気です。
メモに記載しつつ、高い建物から飛び降り、いつもの酒場に入る。
来店に振り返ったのは、むさくるしい店主――ワーグナーと、超カワ綺麗なウェポンマスター――エトワール。彼女の方は、笑みを浮かべて軽く手を振ってくれた。
「よぅ、エトワール！　……って、お前は飽きもせずにコンソメスープにパスタかよ。他のモン喰えよ」
「お前は食事の回数を増やせ。一日三回が目標だぞ」
「で、そう言うキルシュはなんにするの？」
「んー……野菜スティックで」
「却下だ。鴨肉のローストサンドにジュリアンスープ。これくらい喰え」
「多いって……」
言いつつもカウンターに腰掛け、エトワールと対談する。
「ドラゴンは帰ったろ？」
「ええ、そうみたいね。村長の娘さん、何でかあなたの事を更にカッコよく見てるみたいよ？」

「当然！　この稀代のイケメンにして才覚溢れる術の使い手、ありとあらゆる心得を供えた勇者キルシュ様に向かって、当然過ぎる事を――」
「私、帰るわね」
「出来心やったんや見捨てんといてーなぁ、後生やさかい！　な！？」
「その変な訛りはなんなの？」
「いや、咄嗟に出てくるんだけどさ……何なんだろうな？」
「私に聞かれても困るわね」
　と、無造作に鴨のローストサンドに白の陶器カップに入ったジュリアンスープが置かれた。あ、ジュリアンスープってのは千切り野菜のスープで、薄いブイヨンと塩で味付けしたもんだぜ？　ブイヨンの代わりにコンソメでもいいけどな。
　ローストサンドに手を伸ばし、齧る。サニーレタスとチーズに挟まれた鴨肉を噛むと、温かくコクのある肉汁が染み出してくる。美味い。
「どうだ、食べる楽しみを覚えやがれ」
「美味いんだけどさぁ……なんつーか、腹が減ってた方が落ちつくっつーか……」
「少し筋肉付けたほうが、カッコいいわ」
「やっべー急に食欲が沸いて来たぞ～？　うん、美味ぇ！」
　単純だな、お前……とでも言いたそうなワーグナーを無視し、食べておく。筋肉筋肉、筋肉センセーションだ！
　そんな食事をしていると、急に誰かが来店。……って！？
「あ、国王じゃん！　どうしたんだよ」
「いつも思うが、フレンドリーじゃなお前……」
「何の用だ？　俺は今、筋肉に目覚めつつあるんだ」
「そんなむさくるしい事をしておる場合ではないぞ！」
　髭面をこちらに近づけ、何かの書類を手渡してくる。なんぞ？
「お前……一体何をしたのじゃ！？」

「あー……？　何々、『聖アバラスタ王国は、勇者キルシュの登城を所望する。条約締結もついでに、彼へと一任させたい』」
「何かしたじゃろ！　あの失礼な手紙を後から送ったのか？」
「まさか！　俺の思いを込めたラブ☆レターを内封しといただけだ」
「それじゃあああああああっ！！」
国王の悲鳴は、この狭い酒場で悲痛に響いていった。
「どんまいっ♪」
「可愛く言うでないわ！」
あ、聖アバラスタ王国に行く事になりました。

三章　儚い容姿のお姫様～ウホッ、もあるよ！～　前編（後書き）

相変わらずこのコピペは病気過ぎる。
パワポケ１４！　准が……准が攻略できちゃう！？　現在、突撃甲子園を制覇し、札侍と魔球リーグを順次攻略中。てか、魔球リーグがムリゲー臭い件。ねぇ、あの最後のヤツ勝てるの？　何でｌｖ３の必殺魔打法をバンバン使ってくるの？
楽しみながらやっております。三回、Ｄｓ投げた（笑）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7655y/

スケベ勇者の桃色珍道中～目指せ、ハーレムの旅～

2011年12月4日01時50分発行